

ブログ「古田史学の継承のために」議論の記録 2

2017年9月7日(木)

●書紀持統紀の吉野行幸記事の真実 (川瀬さん)

●書紀持統紀の吉野行幸記事の真実

川瀬健一

はじめに：

「主語有無の論証」を使って、書紀天武紀下・持統紀の宮関係記事を精査したものを発表して以後、大下さんと上城さんから、このように読むことは無理ではないかとのことのご批判を頂いた。

そのうちの上城さんからのご批判は、古田さんがすでに、書紀持統紀 31 回の伊勢行幸記事は、34 年前の九州王朝天皇が佐賀なる吉野に行幸した記事の盗用としているのだから、私の読みは成り立たないとのものであった。

私は、古田さんの論は、「主語有無」の問題に気づかないままの論説なので、34 年遡り説 そのものが成り立たない可能性があると考え、古田さんの論そのものを精査してみた。

古田さんが書紀持統紀の吉野行幸記事は、34 年前の九州王朝天皇の佐賀なる吉野行幸記事の盗用だと判断した論拠は、その 31 回の行幸の中に、干支があわず、持統 8 年の年次ではその記事そのものが成り立たないという「事実」を見つけたからだ。

古田さんの論説を幾ら読んでも、これ以外の明白な史料根拠はなかった。

そこでこの判断そのものが成り立つのかどうか精査してみた。

結論は、まったく成り立たない。古田さんの事実誤認である。

●書紀持統紀の吉野行幸記事の真実 (川瀬さん)

<http://kawa-k.vis.ne.jp/201796yosino.pdf>

コメント

川瀬さんへ

「持統紀の吉野行幸記事の真実」精緻な論証有難うございます。

本件は難しい問題で解説には小生の力量に余るものですが、勉強のため下記質問しますので検討おねがいします。

<持統紀干支の問題について>

小生も持統紀吉野行幸記事を干支の問題だけで白村江前に移動するのは無理があると思います。しかし、干支があてられていればその記事はその時のものであったとも確実に言えないと思います。

例えば推古紀の遣唐使記事は明らかに12年後の唐の時代になってから近畿天皇家が唐へ送った使節の記事ですが、日付干支は推古時代のもので書き換えられています。

日本書紀編纂時にすべての日付干支を詳しくチェックし書き直したのではないのでしょうか。

<吉野行幸について>

天武・持統紀には「竜田・広瀬を祭る」と、何故それほど何回も竜田・広瀬で祭事が必要だったのか、わけの分からない記事があります。吉野行幸もなぜそれほど行かねばならなかったのか、よく理解できません。

持統が奈良吉野へ行っていたとするならば、何らかの実利的な目的があったのではないかと、竜田・広瀬問題も含めもう少し事情を明らかにする必要があると思っています。

<佐賀吉野について>

古田先生は白村江戦における九州王朝水軍の拠点として佐賀吉野にあった、また天武の吉野の歌も佐賀吉野のものであるとされました。小生は、はっきりとした確証はありませんが、佐賀吉野は風光明媚な保養地ではあっても、軍事拠点となるようなところだったのか、どうしても理解できません。

有明海は干満の差が大きすぎ艦船を適時に運用できるのか、松浦水軍の拠点である東シナ海方面に艦船を隠せる場所は沢山あり、倭国水軍の拠点は筑紫から佐賀の沿岸にあったのではないかと、と思っています。天武と佐賀吉野の関係も天武の歌の解釈だけではもう一つ釈然としないものがあります。現在「古田史学の会」では唐軍が佐賀吉野に駐留していたとの説に立っていますが、東シナ海から山を隔てた所にわずかな人数の駐留軍が拠点を構えるのか疑問です。古田先生の説は今のところまだ「仮説」の段階にあるのではないかと、と思っています。川瀬さんが佐賀吉野をどのように位置づけられているのか、お聞かせいただければ有り難いのですが。

<壬申の乱の九州勢力>

壬申の乱には高市皇子が主要な役割をはたしています。高市皇子の母は宗像徳善の娘です。宗像氏は天武時代から急速に筑紫で勢力を拡大します。このころ白村江で壊滅した九州王朝主力軍はすでになく、白村江戦に力を温存した宗像、大分の勢力が壬申の乱の天武軍の西日本からの中核勢力になったと思います。川瀬さんは七世紀後半の九州王朝の力をかな

り評価されていますが、小生は唐軍の占領下、配下の兵力もなくなり、九州王朝はこの時代には衰弱しきっていたと思います。また、史料根拠ない説を展開していると批判されそうですが、川瀬さんの論文を読ませていただいたの質問と感想です。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月8日(金) 17時40分

大下さんへ

大事な箇所に鋭いご質問をありがとうございます。

1：干支の書き換えの問題

まだ推古紀の遣唐使記事を精査していないので、そのあとにお答えしたいとおもいます。

2：吉野問題

たしかに「竜田・広瀬を祭る」などまだまだ解明しなければいけない問題はあると思います。ここはまだ、書紀の吉野記事を全部抜いて検討している最中なので、何も考えていないので、いつかお答えします。

3：佐賀吉野について

私もここが軍事拠点しかも海軍のという古田さんの理解は疑問です。大下さんと同じく有明海のように干満の差の激しい海に大型の艦船を備える港があったかどうか、適地は佐賀県・福岡県の島嶼部と考えていました。ここは古代の有明海海岸線の復元も含めて、考古学的史料を探して考察しないといけないと考えています。

4：壬申の乱の九州王朝勢力

わたしは「残存勢力」と表現しました。九州王朝直属軍の多くは、陸軍も海軍も壊滅状態だったと思います。だから百済での戦いに出向かなかった勢力。高市皇子の母方にあたる宗像君や大海人に協力した大分君は九州王朝天皇家のおそらく分家筋。なぜ戦に行かなかったかは不明ですが。これが西日本の九州王朝残存勢力。東日本では書紀に出てくる勢力は上毛野君だけ。それ以外は動員されていないのではないのでしょうか。そして東日本には九州王朝の直属軍はいないと考えています。それは九州王朝の畿内は八か国だと考えているからです。九州と瀬戸内だけ。まだまだ分家筋の各王国も近畿天皇家同様に半ば独立していますから、直属軍は畿内だけ。

百済での戦いは直属軍と上毛野の援軍だけであったように思います。もっと記事を精査して将軍の名からここを確定したいと思っています。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月9日(土)00時24分

1：書紀の干支書き換えの問題

推古紀の対唐外交の記事の問題。検討してみました。たしかに古田さんがおっしゃるように、この記事が12年後の唐ができてからの外交記事だとすると、干支がまったく合わなくなります。したがって書紀編者がこの記事が12年前に動かしたときに、干支もすべて暦に合うように修正したと考えるしかなくなります。

しかしこう考えたとき、「日本書紀」という史料の価値はほとんどなくなります。信用できなくなるのです。

この史書は多くの他の史書から盗用した記事からなっており、九州王朝の史書からの盗用も多数あることは予想されます。しかし盗用したり時期を移したりしたとき、元記事の干支をすべて移した先の時期の暦に合うように改変してしまったとすると、どこが盗用記事なのか移動記事なのか判断不能に陥ります。したがって書紀は歴史史料としては使えない。

こういう結論になることを大下さんは理解しておっしゃったのでしょうか。

おそらく古田さんが持統の吉野行幸記事すべて34年前の九州王朝天皇の佐賀なる吉野行幸記事の時期を動かしての盗用だと考えたとき、たった一か所に干支があわず、34年前に動かせば合うという事実だけで、盗用だと判断したのは、一か所でも干支があわないことが書紀編者が記事を盗用して、干支が合うように改変した痕跡だと判断したからだと思います。

この結論に達していたから古田さんは、書紀記事はそのままでは使えない。考古資料や金石文や中国の史書などの他の史料と合わせないと使えないとしたのだと思います。

でも金石文やたとえば木簡は断片的。そして外国史料も日本を記述するのが目的でないから断片的。したがって書紀からは古代日本を復元するのは無理となります。そこで古田さんは万葉集など他の史料の解釈や言素論を駆使しての歴史理解に進んだのだと思います。

ということは古田さんは、書紀を解読する方法を見つけることに失敗したと言っていたに等しい。

ではどうするか。

書紀編者が記事を時期を動かしたり盗用したりした場合に干支には手を付けていなかったと仮定してみましょう。

そうすると、書紀推古紀の対唐記事の古田仮説が間違っていたのではないかとの結論に論理的には行きつきます。

つまり古田さんのその前の理解、「失われた九州王朝」で示した推古朝の対隋独自外交の理解が正しかったのではないかということになります。

2：書紀推古紀の対「唐」外交記事について

古田さんがこの記事に対隋外交記事だと判断した根拠は、この記事の最初の対唐遣使記事の年代に相当する大業四年に倭国が使いをよこしたとの記事が、「隋書」本紀にあったからです。そしてこの記事には続きがあり、大業六年にもまた倭国遣使の記事がある。

この倭と隋王朝に「日出るところの天子・・・」の国書を送って隋皇帝を激怒させたタイ国（大倭国）とは別の国である。

これが古田さんの最初の理解です。

これを変えたときの根拠はなんであったか。

一つは遣使した相手が「大唐」と明記されていること。

一つは中国の正使斐世清の官職が「隋書」と書紀とでは一致しないこと。

この二つでした。

また、「隋書」の記事と書紀の記事をつなぐ記事が、「隋書」の記事の末尾にある「朝命すでに達せり、請うすなわち塗を戒めよ」の「戒塗」は旅行の準備をするということだから、ここは従来帰国の準備と理解されてきたが、そうではなく筑紫から近畿の倭国に旅をする準備をせよと理解すべきだとしたことでした。

最後の理解を元に戻し、書紀記事の「大唐」との記事に依拠してみると、「隋書」の記事と書紀推古紀の記事とはまったく関係がない。推古紀の記事は12年後の唐との外交記事と考えるべきとなったのでした。

この際に正使斐世清の官職は、隋時代より唐時代の方が格下げになったと理解した。理由はタイ国（大倭国）に使いをして皇太子と口論になって戻ってくるという失態をしたからだ。

ここをもう一度、「隋書」の大業四年と六年に倭国が遣使したとの記事に依拠して考え直す必要があると思います。

再検討のポイント。

1：国号問題＝元記事は「隋」だったのがなぜ「大唐」になったか。

2：正使斐世清の官職が違うのはなぜか。

1については、ここを隋としてしまうと、「隋書」の有名な「日出るところの天子・・・」の国書の問題と読者が繋げて考えてしまいます、九州王朝の存在を消したい近畿天皇家としてはまずい。そこで国名を大唐に替えて、この有名な国書の話は抹殺したと考えることができます。

2については、古田さんのように推論に依拠しないで、「隋書」本紀で斐世清の官職を精査してみる必要があると思います。

以上、書紀編纂過程で干支が改変されたのではないかとのご指摘に対する私の回答です。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月10日(日)14時24分

川瀬さんへ

百済の戦い参加の九州王朝軍について、唐からの捕虜の帰還記事も参考になると考えています。

<九州王朝捕虜帰還兵の記事>

『日本書紀』『続日本紀』などに百済での戦いの帰還兵について次の記事が見えます。

- ・持統四(六九〇)年、筑後国上陽咩郡(福岡県八女市)の住人大伴部博麻が帰国。
 - ・持統十(六九六)年 伊予国風早郡(愛媛県北条市)の物部薬、肥後国皮石郡(熊本県菊池市)の壬生諸石が、唐の地で苦しんだことを慰め褒賞を与える。
 - ・慶雲元(七〇四)年 讃岐国の錦部刀良、陸奥国の生王五百足、筑後国の許勢部信太形見らが遣唐使粟田真人とともに帰国。
 - ・『日本霊異記』には伊予の越智直が捕えられ唐に連行されたが、同族八人とともに脱出に成功して帰国したこと、備後国三谷郡(広島県三次市)の長官が百済での戦に参加し、百済の僧を連れて帰国したことが書かれています。
- これらの記事から朝鮮半島派遣軍には筑紫・肥後(福岡・熊本県)、四国の伊予・讃岐(愛媛・香川県)、中国の備後(広島県)、さらに陸奥の兵が少なくとも参加していたと考えられます。

これらの地域が九州王朝の直轄地域と考えられないでしょうか。

<近畿天皇家傘下の軍>

一方近畿天皇家の直轄軍は斉明の死を理由に天智が大和へ引き上げ、百済の戦に参加していません。また『備中国風土記』に「邇摩郷(現在の岡山県倉敷市)は斉明天皇の要請で二万の兵を準備したが、斉明天皇の死で兵は出発しなかった」とあります。岡山の兵も出兵を中止しています。現在の広島・岡山の県境が九州王朝と近畿天皇家の勢力範囲の境だったと考えています。

投稿：大下隆司 | 2017年9月10日(日)16時46分

大下さんへ

●九州王朝の版図（西国）の東の果て

大下さんは、<『備中国風土記』に「邇摩郷（現在の岡山県倉敷市）は斉明天皇の要請で二万の兵を準備したが、斉明天皇の死で兵は出発しなかった」>を持って、備中と備後で分けられ、備中以東を近畿天皇家、備後以西を九州王朝の版図とされました。

では次の事例をどう考えられるのでしょうか。

1：敏達紀十三年「是歳、蘇我馬子宿禰、請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等・池邊直氷田、使於四方訪覓修行者。於是、唯於播磨國得僧還俗者、名高麗惠便。大臣、乃以爲師、令度司馬達等女嶋、曰善信尼年十一歳、又度善信尼弟子二人。其一、漢人夜菩之女豊女名曰禪藏尼、其二、錦織壺之女石女名曰惠善尼。壺、此云都苻。」修行者を探したところ「播磨国」で見つけたと。つまり近畿天皇家では仏法が普及していないときにすでに播磨では仏法が普及していた。つまり播磨が九州王朝の版図（西国の）の東限なのではないか。

2：天武紀。大海人が東国に向かって挙兵したことを知った近江朝は次のように指令した。<則以韋那公磐楯・書直薬・忍坂直大摩侶遣于東國、以穗積臣百足・弟五百枝・物部首日向遣于倭京、且遣佐伯連男於筑紫、遣樟使主盤磐手於吉備國並悉令興兵。仍謂男與磐手、曰「其筑紫大宰栗隅王與吉備國守當摩公廣嶋二人、元有隸大皇弟、疑有反歟。若有不服色、即殺之。」>と。

援軍を吉備と筑紫に依頼したということは、吉備は近江朝の版図には入っていなかったということ。この時の吉備国守の治めている範囲がどこかわからないが、吉備に属する備前・備中・備後は確実。もしかしたら播磨もその権限内かもしれませんが。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月11日（月）14時21分

川瀬さんへ

<隋・唐代の官職>

9月10付け川瀬さんのコメント末尾「2 については、古田さんのように推論に依拠しないで、「隋書」本紀で斐世清の官職を精査してみる必要があると思います」について。

本件について、先月大阪市森ノ宮における講演会「誰も知らなかった古代史シリーズ（19）」で谷本茂さんが、『日本書紀』の絶対年代を疑う」というテーマで講演をされ精緻な分析をされています。

谷本さんは『隋書二十八（百官下）』『旧唐書』『六典』に記されている隋・唐時代の官職

の推移を調べ、倭国伝にある裴清の身分「文林郎」は煬帝の時の官職名で、推古紀の裴世清の「鴻臚寺の掌客」という官職名は煬帝の時にはなく、唐になってからのものだということを明らかにされました。

推古紀の遣唐使記事が唐に派遣されたものであることは、隋・唐代の官職名の推移からも証明されたのです。

ご参考までに谷本さんの発表資料を別途メールします。

谷本茂さんは古田先生と共著で『古代史の「ゆがみ」を正す』（新泉社、1994年）を出版された方で、正しい日本の歴史を市民の方に知ってもらおうと、NHKカルチャーセンターなどで講演をされています（この秋はNHKカルチャー神戸教室で「神代の正しい解釈」についての連続講座が予定されています）。

<日本書紀の干支>

古田史学の会で34年遡上説が初めて取り上げられたとき、「書紀」の日付干支についていくらか調べたことがあります。小生が調べた範囲では日付干支もすべて内田正男『日本書紀暦日原典』（内田正男編著。雄山閣、1978年版）にある表の通りでした。

すべて書き換えられていました。

このこともあり、『九州年号』の研究』28頁で古田先生が；

「イデオロギーの書である日本書紀を基盤として、歴史を再構成しようとするとき、その”再構成”それ自身が、歴史の真実に非ず、”イデオロギー史観の新作成”とならざるを得ないであろう。これに対して、私たちのなすべき道は何か。他でもない。中国史書、金石文、考古出土物を基準におかねばならない（一部抄訳）」

と示された見解を小生は正しいと思っているものです（9月4日付「中皇命とは誰か」の小生のコメント欄参照下さい）。

古田先生のご指摘の通り、小生は『日本書紀』をイデオロギーの書であると理解していません。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月11日（月）18時20分

川瀬さんへ

●「九州王朝の版図」川瀬さんの11日付コメントについて。

<播磨の仏教伝来>

播磨には古代の廃寺が沢山あります。播磨への仏教伝来については南朝・百済⇒九州王朝からのルートと日本海を渡って新羅から直接伝来したルートの二つの経路があったと思います。摂津の「明要寺」は百済⇒九州王朝ルートで播磨・摂津に伝わったものと思います。大和盆地の南の隅、飛鳥地域にいた近畿天皇家へ仏教が伝わったのはその後です。

畿内の六世紀の始めの頃は皇位継承戦争で分裂していて、その後継体が権力を握るが宣化・安閑の時代にはまだ混乱が続く欽明紀もほとんどが朝鮮半島の記事で、国内の様子はよくわかりません。

畿内が蘇我氏を中心に安定したのは用明・推古のころで、このころから畿外への影響力を拡げていったと考えています。

播磨がいつ近畿天皇家の影響下に入ったのか？古代仏教寺院の調査が必要です。先日も古田史学の会ハイキングで針間国の中心部を歩いてきましたが、大阪からは加古川を越えねばなりませんので遠いです。古田史学もせつかく全国組織があるので、地域分けして、それぞれの方が地元を調べればもっと情報が集まり、研究が進むと思っているのですが。

<壬申の乱の時の勢力分布>

白村江戦から10年近くたち、唐軍も本土に進駐しています。この時代、朝鮮半島情勢も大きく変わり、唐と新羅が対立状態になっています。従って日本列島各地域の勢力図も大きく変わったと思います。壬申の乱の時は唐・九州王朝の傀儡政権と近畿天皇家の二つの大きな勢力があり、唐が近畿天皇家の内紛を利用して乱を起こしたのではないかと推定しています。

壬申の乱の詳細な検討が必要です。

このように六世紀初めから七世紀末まで日本列島は大きく変化していて、九州王朝と近畿天皇家の勢力範囲も時代により変化していったものと考えています。そして百済での戦いの時は帰還捕虜の記事などから広島・岡山が境界と考えたものです。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月12日(火)14時13分

大下さんへ

●隋の官職

谷本さんは史料を読み間違っています。

隋書/卷 28 百官下の高祖時代の官制の中に、「鴻臚寺統典客、司儀、崇玄三署。各置令二人。崇玄則惟置一人。典客署又有掌客十人。司儀有掌儀二十人。等員。」という記事があります。

外交を司る鴻臚寺は典客が統括し、その典客の元には掌客が 10 人いると定められています。典客は正八品で掌客は正九品です。

また鴻臚寺は一時廃止されていたのが、「十二年、複置光祿、衛尉、鴻臚等寺。諸州司以從事為名者，改為參軍。」と復活したとあります。

煬帝が即位した後で鴻臚寺の官制を改正しましたが、その記事は「鴻臚寺改典客署為典蕃署。初煬帝置四方館於建國門外，以待四方使者，後罷之，有事則置，名隸鴻臚寺，量事繁簡，臨時損益。東方曰東夷使者，南方曰南蠻使者，西方曰西戎使者，北方曰北狄使者，各一人，掌其方國及互市事。每使者署，典護錄事、敘職、敘儀、監府、監置、互市監及副、參軍各一人。錄事主綱紀。敘職掌其貴賤立功合敘者。敘儀掌小大次序。監府掌其貢獻財貨。監置掌安置其駝馬船車，並糾察非違。互市監及副掌互市。參軍事出入交易。」。ここで典客の名を典蕃と改めたとあるだけで、典蕃の下にいる役人のことが書かれていないのを、谷本さんは掌客はいないと誤読したのだと思います。

文林郎は高祖の時代に三年四月に置かれてこの時には正六品以下，從九品以上と定められていたのを、煬帝が即位して「秘書省 文林郎二十人，從八品」と改正したとあります。

したがって斐世清が從八品の秘書省文林郎と正九品の鴻臚寺掌客を兼ねることは可能です。煬帝が無礼な国書を送ってきたタイ国には秘書省の役人としての斐世清をおくったのはこれが非公式外交だから。そして推古の倭国には外交を司る鴻臚寺の掌客としての斐世清をおくったのはこれが正式な外交だから。そしてこの時斐は国書を持参していた。

斐世清の官職の異同を根拠にした古田説は崩壊します。

あと、「宝命」問題も、隋書を精査してみると、煬帝の治世は最初から荒れていて、各地で反乱がおきて鎮圧し、一方で大赦令の連発と租税免税の連発ですよ。だからたびたび煬帝は詔を出し、その中で自分が高祖が賜った天命を受け継いで、その業を継承していると歌っています。帝位を継いだときの仁寿四年の詔には「朕肅膺寶曆，纂臨萬邦」とあり、高句麗討伐が失敗した大業 10 年の詔には「朕纂成寶業，君臨天下，」と受け継いだものに「宝」という語を冠して、父祖から受け継いだ尊いものという意味で使っています。

この観点からは天命＝宝命と解釈した古田説は誤りで、皇位を失いつつある煬帝が、発した語としては推古への国書の「宝命」という言葉は適切だと思います。

またこの観点からすると、古田さんが推古紀 十七年「百濟王命じて吳国に遣わす。其の国、乱れ有りて入ることを得ず・・・」を大業五年の煬帝絶頂期にこんなことがあり得ないとしてこの記事を 12 年後ろにずらしましたが、これも安易な記事移動だと思います。

さらに書紀記事が 10 年前後動いているとして古田さんがあげた舒明紀三年「三月庚申朔、百濟王義慈、皇子豊章を入れて質となす」ですが、舒明三年のときの百濟王は武王ですが、彼の本名は余璋。そして日本の人質に出された百濟王子の名ですが、書紀には「百

「済王子余豊」との記述と「百済王子豊章」もしくは「百済王子豊璋」の記述があります。隋書や旧唐書では、「百済王子余豊」です。このことから書紀記事がもともと百済王の名を間違えたか、書写段階で写し間違えた可能性もあります。たぶん後者でしょう。書紀の元元の記事は「三月庚申朔、百済王璋、入王子豊爲質。」ではなかったか。

こう考えていくと、古田さんが、書紀推古紀の大唐遣使記事を 12 年後ろにずらした解釈はまったく成り立ちません。

古田さんの最初の解釈、つまり推古朝がすでに隋朝との間に独自外交をしていたとの解釈に立ち戻るべきです。こうすれば隋書に大業四年・六年と倭国遣使とあることとまったく矛盾しなくなります。

では書紀が「隋」と書かず「大唐」と書いた理由はなにか。

書紀は隋を嫌悪し煬帝と言えは悪徳無法の君主として描いていることは古田さんのおっしゃるとおりです。だから隋とも友好関係を持っていたとは唐との手前書けないし、隋と書いてしまうと、あの有名な隋書の「日出るところの天子・・・」の国書を思い出し、消し去りたい九州王朝の存在が明らかになってしまいます。

だから年次は正しく隋の煬帝の時代に記事を入れておきながら、国名を「大唐」としたのだと思います。

●書紀の干支書き換え問題

書紀は干支を全部書き換えたとの大下さんのご判断は、誤った古田説を是としたところから出てきた臆気楼だと思います。

書紀は盗用したり年次を動かした記事の干支が暦と合うように改変したとしてしまうと、どの記事でも論者が勝手にこれは盗用だとかこれは移動されたと言うことが可能になり、書紀を恣意的に解釈することが可能になります。古田さんがすでにこの道に踏み込んでしまったから、正木さんのように恣意的な解釈が出てきたのだと思います。

したがって古田さんが書紀をイデオロギーの書であるとしたことは、古田さんは書紀を解読できなかったことの自己表白とみるべきです。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月12日(火)17時21分

大下さんへ

九州王朝の版図は時代とともに変化したこと。これは確かなことだと思います。だから時代時代の変化を読み解かなければなりません。

<壬申の乱の時の勢力分布>

>壬申の乱の時は唐・九州王朝の傀儡政権と近畿天皇家の二つの大きな勢力があり、唐が近畿天皇家の内紛を利用して乱を起こしたのではないかと推定しています。

この時期本当に九州王朝は唐の傀儡政権だったのでしょうか。これも史料に基づいた再検討が必要だと思います。

定説派は唐軍 2000 の存在を無視しすぎですが、古田学派はその存在を過剰にとらえ過ぎだと思っています。

私はむしろこの時期の九州王朝は、近畿の王・天智の傀儡になりつつあったのではないかと。天智の近江京は九州王朝天子のための都ではなかったか、と考えています。それは天智紀の天智即位のところに「或る本に言うとして、その一年前の三月、つまり近江京遷都の月に即位とある」との史料があるからです。六年三月に即位したのが九州王朝の新天皇、七年春正月に即位したのが天智。こう考えるとすでに、九州王朝は天智の傀儡となっている。

言い換えれば天智とその息子大友は九州王朝を頂いて列島を統治しようとしていた。

この状態で天智が死去し、近畿天皇家内部に内紛興ろうとしているときに、次に見るような新羅と唐の対立がおきたらどうなったか。ここが壬申の乱を考えるときの必須の二つの視点だと考えています。

先日見た NHKBS の英雄たちの選択で「壬申の乱」を取り上げたとき、複数の学者（定説派）が、新羅の存在を無視できないのではないかと。特にこの時期、新羅が唐から自立し、朝鮮半島の統一へと進んでおり、唐と新羅とが一触即発の状況。近畿王朝は伝統的に新羅との関係の深いところなので、この時期の新羅からの使節は、唐と戦うために援助要請だった可能性もあるし、同じく唐朝が使節を送ってきたのも、対新羅戦争のための援助要請だった可能性もあると、指摘していました。つまり東アジアの緊張の中で、新羅と唐とが日本をどちらが味方につけるか争っていたと。新鮮な視点だと思いました。

壬申の乱の記述の中に、この時期にはすでに筑紫大宰が置かれていたことが記され、筑紫大宰は近江朝の援軍要請を拒否しています（同じく吉備国守も）。

この筑紫大宰と吉備国守は、どの勢力が任命したものなのか。ここも明らかにしなければいけないと思います。

唐の使節は軍を伴って何度も来ていますが、滞在期間は長くても半年ほど。そして軍の数は、数百人規模から 2000 人。この程度で傀儡にできたか？

百済での海軍陸軍の壊滅的敗北で九州王朝直属軍はほぼ解体されたとみるべきでしょう。ということは近畿天皇家も含めて、この戦に参加しなかった列島の各王朝・豪族勢力がここで自立したと考えるべきではないでしょうか。その中の最大勢力が近畿天皇家だ。だから彼らは九州王朝を傀儡化した。

しかしその天智・大友朝が新羅と結ぼうとしとしたら、他の勢力はどうしたのだろうか。

そして唐はどう動いたでしょうか。

ここらあたりを壬申の乱の史料を再度精査してみる必要があると思います。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月13日(水) 16時59分

川瀬さんへ

9月12日付コメントに対して下記します。

<日本書紀の年次の移動について>

東京国立天文台の谷川清隆氏が「日本書紀天文記録の信頼性」(ネット掲載)などで、日本書紀に記されている天文記事が実際にその時代に起きたものかどうかを検証し分析されています。

谷川氏によれば、推古紀、天武紀の天文記事は正しいが、天智、持統紀などの記事の天文記事は実際におきていないと結論づけられています。

この結果に従えば「日本書紀の記事の中では確実に年代移動がされたもの、若しくは不正確なものがある」ということになります。

<推古紀の年代移動について>

推古紀においても古田先生は「推古十七(609)年の呉国記事は、この時代に中国大陸で呉国は存在せず、12年後に出来ていることから、この時点の推古紀外交記事の干支一回り移動」したものとされています。推古紀も天文記事は正しいが、不正確なものも紛れ込んでいることになります。

<大唐の名称について>

唐の目を意識した『日本書紀』において、行きもしない遣唐使のことや、貰ってもいない唐の皇帝から書簡を受け取ったと書紀は意図的に記したのでしょうか。小生は疑問に思います。

<裴世清の位階について>

川瀬さんご指摘の、裴世清は秘書省と鴻臚寺を兼務していたかどうか、また訪日記事で母体の省庁を使い分けていたのか小生は疑問に思います(煬帝は秘書官を外交特別使節として使っていたのか調べたうえでの発言ではありませんが)。

<その他隋書大業3、4年記事。舒明3年記事>

これらは別の記事であり、個別に分析の上、判断を下すべきと思います。安易に推古紀・倭国伝記事の解釈が確定しないままに結び付けるのは仮説の積み重ねになると思います。

<小生の考え>

小生も史料根拠のない書紀記事の年代移動は絶対に避けるべきと思います。小生自身の説の見解にも書紀記事の移動を組み入れたことはありません。

古田先生も自由な年代移動を戒められていました。

しかし、天文記事の検証から書紀記事に疑問が呈されている以上、日本書紀の記事解釈については、いろいろな角度からの精緻な検討が必要と思っているものです。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月13日(水) 19時31分

大下さんへ

論点が多岐にわたるので、まず斐世清の官職である「文林郎」(隋書)「鴻臚寺の掌客」(書紀)についての谷本見解の間違いについてさらに詳しく報告します。史料を送っていただいたので詳しく再検討できました。

「文林郎」が隋の官制であり、唐の官制にないことは確かめられました。問題は「鴻臚寺の掌客」です。

まず隋の高祖の時代の鴻臚寺の組織は次のようになっています。

「鴻臚寺統典客、司儀、崇玄三署。各置令二人。崇玄則惟置一人。典客署又有掌客十人。司儀有掌儀二十人。等員。」

鴻臚寺の職掌は「掌蕃客朝會，吉凶弔祭」と定められており、この役所には典客署・司儀署・崇玄署の三つの役所があります。ただ残念ながら各署のその職掌は説明がありません。そこで隋の官制をほぼ踏襲している唐の官制でみると、鴻臚寺の典客は「典客令掌二王后之版籍及四夷歸化在蕃者之名數。丞為之貳。凡朝貢、宴享、送迎，皆預焉。辨其等位，供其職事。凡酋渠首領朝見者，皆館供之。如疾病死喪，量事給之。還蕃，則佐其辭謝之節。」と定められ、王后の版籍と四夷の帰属の状況の管理が職掌であるので、朝貢した使節の送迎や饗応、そしてそれらに位を与えたり中国滞在中の一切の面倒を見るのが職掌だとあります。

司儀署は「司儀令掌凶禮之儀式及喪葬之具。」とあるのでさまざまな儀式がその職掌です。

このため外交を司る鴻臚寺の典客署には長官である「令」が二人置かれ、さらに次官に

あたる「掌客」が十人置かれていました。

そして掌客とはいったい何を職掌としていたのか。隋の官制にはその説明がないが、隋の官制をほぼ踏襲している唐の官制の中の鴻臚寺の掌客の職掌を見てみると、新唐書では「送迎蕃客」と定められている。

これを煬帝は改正した。随書にはこう書かれています。

「鴻臚寺改典客署為典蕃署。初煬帝置四方館於建國門外，以待四方使者，後罷之，有事則置，名隸鴻臚寺，量事繁簡，臨時損益。東方曰東夷使者，南方曰南蠻使者，西方曰西戎使者，北方曰北狄使者，各一人，掌其方國及互市事。每使者署，典護錄事、敘職、敘儀、監府、監置、互市監及副、參軍各一人。錄事主綱紀。敘職掌其貴賤立功合敘者。敘儀掌小大次序。監府掌其貢獻財貨。監置掌安置其駝馬船車，並糾察非違。互市監及副掌互市。參軍事出入交易。」

これを谷本さんは、鴻臚寺の仕事を少なくして組織も簡略化したととらえましたがこれは間違いだと思います。

煬帝による改正のポイントは二つです。

一つは典客署を典蕃署と名前を改めた。

さらに最初は別に四方館を置いて四方使者を擁したが、後にこれを改めて、事ある時に設けることとし、鴻臚寺の下部の役所とし、その管轄の仕事を簡略化した。これ以下の官職は、鴻臚寺の管轄に置かれた東夷使者・南蛮使者・西戎使者・北狄使者のそれぞれに付けられた署の人的構成とその権限を示したもの。

この使者署の職掌は極めて限られたもので、いくつかの監督官の下には、叙位やその功罪の判定、貢献された財貨の管理や駝馬や船車を管理する部署や交易を管理する部署しかない。つまり事務部門であって、先に定められていた朝貢した蕃夷の使者の送迎や饗応など、典客署が行っていた大事な仕事がまったくないのだ。

ということは典客署はその名称が典蕃署と替えられただけで、その人員構成や権限はそのままだったということ。典蕃署の構成は、長官である令が二人と、次官にあたる掌客が十人置かれた体制は変わらなかったのだ。

隋の煬帝の時代の鴻臚寺には掌客という官職がなかったという谷本見解は、史料のまったくの誤読だとわかる。

したがって谷本見解に基づいて、「文林郎」である斐世清をタイ国に派遣したのは隋王朝で、「鴻臚寺の掌客」である斐世清を倭国に派遣したのは唐王朝であるとの見解は成り立たない。

やはりここは、隋王朝が、対抗してきたタイ国には国書を持たずに様子を見に秘書省の高官である文林郎の斐世清を送り、併せて朝貢してきた倭国には国書を持たせて斐世清を正規の外交官である鴻臚寺の掌客として送ったと理解するしかないと思います。

他の論点については別途くわしく論じます。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月14日(木) 01時49分

大下さんへ

●大業四年・六年の倭国遣使記事

大下さんはこれは推古紀の遣使記事や東夷伝タイ国伝の遣使記事とは別記事なので、一緒に考えるのはおかしいとされました。

このとらえ方は完全に間違っています。

この二つの倭国遣使記事と書紀推古紀の遣使記事、そして東夷伝のタイ国伝は全体として一つの問題です。

ここで考えなければいけないこと。

①隋書帝紀に大業四年と六年に倭国遣使記事があり、使節は方物を献じている（つまり朝貢してきた）。しかしこの倭国については、東夷伝には記事がない。

②隋書東夷伝のタイ国伝には、開皇20年と大業三年にタイ国が隋に遣使したとあるが、この二つの遣使記事は、隋書の帝紀にはない。そして二つの遣使記事にあるタイ国国書を読むと、タイ国と隋は対等との考えから通交を望んでいる。明らかに帝紀の倭国遣使とは目的が違う。

以上の事実をどう考えるか。

倭国伝が東夷伝にないのは、倭国が日本列島の代表王朝ではなく、代表王朝はタイ国だからとの古田さんの判断は正しい。

ではなぜ帝紀に倭国遣使があつてタイ国遣使はないのか。明らかに無礼な態度をとったタイ国の行動は帝紀から削除されている。

以上のように考えるしかない。

隋書にみる倭国とタイ国とは別国と考えるしかなく、倭国は隋に朝貢し、タイ国は隋と対等の立場での通交を求めた。

この倭国とタイ国の立場の違いを踏まえて、書紀推古紀大唐遣使記事を考える必要があるのです。

書紀の記事では明らかに推古は隋に臣従の立場を表明しており、隋王朝はこの立場に満足し、国書をもった倭国の使いが戻るとき、外交官をその送迎と隋帝の国書を渡すため来航したととらえられます。

書紀推古紀が国名を「隋」ではなく「大唐」としたことは別に考えなければならぬ問題ですが。

そしてこの開皇20年から大業3・4・6年の中国と東アジアの国際情勢を隋書に基づいて判断してみれば、倭国とタイ国の立場の違いがなぜ生まれたかも理解できるし、同じ

ように高句麗や百済の立場も理解できます。

そして隋朝が倭国朝貢を歓迎し、対当該校を主張したタイ国には不快感を示した理由も、この東アジア情勢からわかります。

古田さんは当時の東アジア情勢を誤解しています。

ここはまた別途論じます。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月15日(金) 12時56分

●隋朝をめぐる東アジア情勢と倭国・タイ国遣使の意味

興味深いことに古田さんの本を読んでもみると、開皇20年と大業三年のタイ国遣使と、大業四年と六年の倭国遣使を、こうした東アジア情勢の中に置いて論じる視点がまったく抜けていることに気が付きます。理由は、隋書タイ国伝として隋への対等外交を展開したタイ国とは九州王朝であるとの論証に、古田さんの力点が置かれていたからでしょう。

このため古田さんは、なぜタイ国は隋朝成立から20年もの間遣使せず、隋が中国統一をなしてから10年もたってから初めて遣使したのかということを中心に全く考察していません。そしてその時の姿勢が対等外交要求だったことの意味も考察していません。

さらに大業四年と六年という形で、これまた倭国が、隋朝成立後30年近く経ってから初めて隋朝に遣使した意味も考察していません。まあこれは古田さんが推古紀の大唐遣使記事を対隋外交ではなく、12年後の対唐外交だったと判断したために、大業四年と六年の「倭国遣使」記事を見逃してしまったためでもあるとは思いますが。

古田さんは隋朝は、二代皇帝の煬帝の末年になって初めて、その支配は不安定化したかのように捉えています。このとらえ方自体が間違いです。

では隋朝成立はどのような東アジア情勢の仮名で行われたのか確認してみましょう。

1)：隋朝の成立と周辺諸国の対応

隋朝が成立したのは、隋の初代楊堅が、北周の静帝の大定元年(581年)二月に静帝から禅譲されて帝位についたところから始まります。この時周辺諸国はどう動いたのでしょうか。高祖文帝即位直後の対外関係を列記してみましょう。

百済の動きを▼、高麗の動きを★で明記しておきます。

最初の七年分です。

※突厥 大定元年二月＝開皇元年二月の直後、八月壬午突厥阿波可汗遣使貢方物。

※直後に隋は吐谷渾をせめて討ち従えた。

八月甲午、遣行軍元帥樂安公元諧、擊吐谷渾於青海、破而降之。

九月、庚午、陳將周羅暉攻陷胡墅、蕭摩訶寇江北。

直後に陳がせめて来たのに対して、陳の南の越王を「益州總管、改封為蜀王。」として手なずけておいて、「壬申、以上柱國、薛國公長孫覽、上柱國、宋安公元景山、並為行軍元帥、以伐陳」と陳に反撃。直後に「突厥沙鉢略可汗遣使貢方物。」と突厥はさらに隋との関係を強化。

※この直後に百濟が動いた。

「★冬十月乙酉、百濟王扶餘昌遣使來賀、授昌上開府、儀同三司、帶方郡公。」

※そして高麗も。

「▼十二月壬寅、高麗王高陽遣使朝貢、授陽大將軍、遼東郡公。」

※▼★二年春正月辛未、高麗、百濟並遣使貢方物。

※二年五月己未、高寶寧寇平州、突厥入長城。西方の諸国が隋に攻め入る。

※二年六月乙酉、上柱國李充破突厥於馬邑。すぐに反撃。

※▼二年十一月丙午、高麗遣使獻方物。

※二年十二月乙酉、突厥寇周槃、行軍總管達奚長儒擊之、為虜所敗。西方でのせめぎあいは続く。

※▼三年春正月癸亥、高麗遣使來朝。

※三年二月癸酉、突厥寇邊。

※三年四月庚午、吐谷渾寇臨洮 西方でのせめぎあいは続く。

※▼三年四月辛未、高麗遣使來朝。 高麗はしきりに隋のご機嫌を伺う。

※三年四月甲午、突厥遣使來朝。しかし隋は反撃。

※三年五月癸卯、行軍總管李晃破突厥於摩那渡口。

※▼三年五月甲辰、高麗遣使來朝。

※三年五月丁未、靺鞨貢方物。

※三年五月壬戌、行軍元帥竇榮定破突厥及吐谷渾於涼州。

※三年八月丁丑、靺鞨貢方物。

※四年春正月甲子、日有蝕之。己巳、有事於太廟。辛未、有事於南郊。

※四年二月丁未、靺鞨貢方物。突厥蘇尼部男女萬餘人來降。庚戌、幸隴州。突厥可汗阿史那玷率其屬來降。

※▼四年夏四月丁未、宴突厥、高麗、吐谷渾使者於大興殿。

ようやく西方でのせめぎあいも終わる。 高麗はしきりに隋のご機嫌を伺う。

※四年五月癸酉、契丹主莫賀弗遣使請降、拜大將軍。

※五年夏四月甲午、契丹主多彌遣使貢方物。

※五年五月甲申、遣上大將軍元契使于突厥阿波可汗。

※五年七月壬午、突厥沙鉢略上表稱臣。ここに西方の雄・突厥との関係は安定。

※六年二月丁亥、發丁男十一萬修築長城、二旬而罷。

※七年二月發丁男十萬餘修築長城、二旬而罷。西方安定を期に防備を固める。

西方では当初西方の雄・突厥とのせめぎあいが続き、南方の陳もまた隋朝成立の期を狙って侵攻したが、隋はなんとかこれらを防ぎ切った。

特徴的なのは、東の諸国。

国境を接する高麗はすぐに朝貢の使いを送り、その南の百済も朝貢の使いを送った。とくに高麗は何度も遣使している。

中国の巨大な統一国家が生まれる予兆を見て、東側の二国はすばやくその御機嫌を取ったことが見て取れます。

そして隋は開皇七年には西方情勢も安定させ（東方もちろん安定）、以後は南の陳を圧迫して中国統一に進みます。

9年正月に陳を滅ぼして中国統一。隋書は次のように記しました。

丙子、賀若弼敗陳師於蔣山，獲其將蕭摩訶。韓擒虎進師入建鄴，獲其將任蠻奴，獲陳主叔寶。陳國平，合州三十，郡一百，縣四百。癸巳，遣使持節巡撫之。

陳王まで捕虜にして陳の国土 30 州を合わせたのです。

この翌年の 10 年八月、陳の南にある越も下り、隋朝による中国統一が成し遂げられます。

2) 隋朝による中国統一と周辺諸国

ではこの事態に周辺諸国はどう動いたか。

ここも一覧にしてみましよう。

※十年七月壬子，吐谷渾遣使來朝。

※十年十一月丙午，契丹遣使朝貢。

※▼十一年春正月辛丑，高麗遣使朝貢。高麗遣使は七年ぶり。

※十一年二月戊午，吐谷渾遣使貢方物。己卯，突厥遣使獻七寶盤。

※十一年三月壬午，遣通事舍人若干洽使于吐谷渾。

※十一年夏四月戊午，突厥雍虞閭可汗遣其特勤來朝。

※▼十一年五月甲子，高麗遣使貢方物。

※十一年十二月丙辰，靺鞨遣使貢方物。周辺諸国は競って隋のご機嫌を伺う。

※十二年十二月癸酉，突厥遣使來朝。己酉，吐谷渾、靺鞨並遣使貢方物。

※十三年春正月丙午，契丹、奚、靺鞨、室韋並遣使貢方物。

※十三年秋七月戊申，靺鞨遣使貢方物。

※十五年五月癸酉，吐谷渾遣使朝貢。

10 年から 15 年隋を巡る国際情勢は安定しているように見えるが、11 年を最後に高麗は遣使を行っておらず、その東の百済（二年朝貢以後はしていない）・倭やタイ国（一度も遣使すらしていない）は隋による中国統一祝賀すら行っていない。

高麗も百済も倭も、そしてタイ国も、東の大国はみな隋朝の様子を見ていることが、西方諸国が次々と朝貢してくることと対照的です。国境を接しておりたびたび使いを送ってきた東方諸国は、隋の支配が盤石ではないことを知っていたかのような動きです。

この直後から、隋国内で反乱が相次ぎます。

3) 隋国内での反乱の勃発

その様子を見てみましょう。冒頭につけた番号は、反乱と思われる事件の出現順です。なんと隋朝による中国統一の直後から反乱は起きていたのです。

1：開皇 10 年 11 月、辛丑，[3]有事於南郊。是月，婺州人汪文進、會稽人高智慧、蘇州人沈玄愴皆舉兵反，自稱天子，署置百官。樂安蔡道人、蔣山李稜、饒州吳代華、永嘉沈孝澈、泉州王國慶、餘杭楊寶英、交趾李春等皆自稱大都督，攻陷州縣。詔上柱國、內史令、越國公楊素討平之。

2：12 年、十一月辛亥，有事於南郊。

3：13 年、九月丙辰，降囚徒。

特徴的なのはこれらの反乱がおきた地域が、すでに陳の故地であることです。陳朝を滅ぼしても、その傘下の諸豪族は決して隋朝に服属はしなかったのです。そしてこれは開皇 17 年以後、旧陳の故地での反乱は続発します。

4：17 年、三月辛酉，上親錄囚徒。癸亥，上柱國、彭國公劉昶以罪伏誅。庚午，遣治書侍御史柳彧、皇甫誕巡省河南、河北。

5：17 年、秋七月丁丑，桂州人李代賢反，遣右武侯大將軍虞慶則討平之。

6：17 年、十二月壬子，上柱國、右武侯大將軍、魯國公虞慶則以罪伏誅。

7：十八年春正月辛丑，詔曰：「吳、越之人，往承弊俗，所在之處，私造大船，因相聚結，致有侵害。其江南諸州，人間有船長三丈已上，悉括入官。」

最後の記事は特徴的です。吳や越では「弊俗」を往承、すなわちいまだに陳や越の統治を慕って、大船を建造し衆を結んで隋の地を犯していると。

隋による陳の討伐から八年、いまだにその故地である吳の地は安定せず、その南の越の地も安定していなかったのです。そして特徴的なのは、隋書帝紀にはこれ以後、この吳と越の地域が安定したとの記述がないのです。これはそのまま隋滅亡までずっと、吳・越の地の諸豪族が隋に従わなかったことを暗示しています。

4) 高祖文帝の突然の高麗侵攻と不安定な隋統治

こうした江南地域の情勢不安定が背景にあるのでしょうか。高祖文帝は開皇 18 年、突

如として大軍を起こして高麗を攻めたのです。帝紀には次のように簡潔に記し、理由は書いてありません。

18年、二月甲辰、幸仁壽宮。乙巳、以漢王諒為行軍元帥、水陸三十萬伐高麗。

詳しいことは東夷伝の高麗伝にありました。

東夷伝の高麗伝には、高麗は隋が陳を征服後、「及平陳之後、湯大懼、治兵積穀、爲守拒之策。」を取ったと記す。つまり兵を整え糧食を蓄えて、隋に朝貢せずこれに抗ったと隋朝は認識したと。これが本当かどうかはわかりませんが。そして高麗王に隋皇帝は、「遣使をせず兵を蓄え穀を蓄える動きを非難し、命に従わないのなら兵を持って平定すると」こう言明した。高麗王湯は表を奉ってこれを謝した。しかし病にあつて死に、子の元が即位。隋の高祖は元を「上開府、儀同三司、襲爵遼東郡公」とし賜衣一襲した。元は表を奉って恩を謝し、王として封じることがを要請したので、高祖は再び王とした。

しかし翌年高麗王元が、靺鞨之衆萬餘騎を率いて遼西を犯したため、高祖は激怒し、元の爵位を奪い、水陸軍を擁してこれを討とうとした。しかし飢饉によって軍の糧食は欠乏しかつ疾病にもあつて、出兵もままならず、高麗王元が恐れかしくまって遣使して謝罪したので、隋は兵を納め、高麗は毎年遣使するようになったと。

なんと高祖文帝の高麗侵攻は失敗に終わっていたのです。

帝紀では高麗は、この一連の戦いを終わらせる謝罪の遣使しかなく、次に高麗が遣使したのは開皇20年であり、それ以後は再び絶えています。

高麗が再び遣使したのは、二代煬帝の世となったのちの大業三年です。

隋との戦に負けなかった高麗は、そのまま隋に朝貢せず、隋朝の支配の様子を見ることとしたようです。

そして以後も隋内の不安定な情勢は続きます。

10：18年、冬十一月甲戌、上親録囚徒。癸未、有事於南郊。

11：18年、十二月庚子、上柱國、夏州總管、任城郡公王景以罪伏誅。

※19年夏四月夏四月丁酉、突厥利可汗内附。達頭可汗犯塞、遣行軍總管史萬歲擊破之。ついに西方の均衡が破れ、突厥が攻め入った。

12：20年、三月辛卯、熙州人李英林反、遣行軍總管張衡討平之。

※▼二十年春正月辛酉朔、上在仁壽宮。突厥、高麗、契丹並遣使貢方物。

前年の12月に「突厥都藍可汗為部下所殺。」があつて情勢は急変。

※「夏四月壬戌、突厥犯塞、以晉王廣為行軍元帥、擊破之。」やはり安定せず。

13：20年冬10月乙丑、皇太子勇及諸子並廢為庶人。殺柱國、太平縣公史萬歲。己巳、殺左衛大將軍、五原郡公元旻。十一月戊子、天下地震、京師大風雪。以晉王廣為皇太子。

14：仁壽元年春正月丁酉、突厥寇恒安、遣柱國韓洪擊之、官軍敗績。五月己丑、突厥男

女九萬口來降。

15：仁壽元年十一月己丑，有事於南郊。

16：仁壽二年十二月癸巳，上柱國、益州總管蜀王秀廢為庶人。交州人李佛子舉兵反，遣行軍總管劉方討平之。

17：仁壽三年八月壬申，上柱國、檢校幽州總管、落叢郡公燕榮以罪伏誅。

なんと隋の南部では反乱が相次ぎ、そこに西方の雄・突厥がしばしば攻め込んでくる。

隋の高祖文帝の末年はこういう不安定な情勢だったのです。

そしてその中で高祖文帝となんと皇太子との間に不和が生じ皇太子を廢嫡して庶人に落として、その側近を殺すという事件が起きてしまう（13の記事）。対立の原因を隋書は記していませんが、内外情勢の不安定が背景にあることは見て取れます。

このような不安定な中で高祖・文帝は病となりやがて崩御します。

※仁壽四年秋七月甲辰，上以疾甚，臥於仁壽宮，與百僚辭訣，並握手獻欬。丁未，崩於大寶殿，時年六十四。（高祖の崩御）

隋の力は開皇 17 年あたりから低下し、江南地方は極めて不安定な情勢となっていた。各地で反乱が続発し、呉や越の人は勝手に船を造って戦をしている。これを抑えきれなくなっていた。さらに東方の雄・高麗を討つもこれに失敗。その上西方の雄・突厥との戦いも勃発。

タイ国が隋に遣使した開皇 20 年とはこうした時期だったのです。隋の力が低下してきたのを見て、対等外交をしようとしたのか。

この時期、百済も高麗も隋に遣使を行っていない。やはり情勢を見ている。

5) 二代皇帝煬帝はどのような中で即位したのか

なんと二代煬帝の直後から反乱が続発し、周辺諸国との戦闘が激化していた。

番号は煬帝治下の反乱がおきた順。

1：仁壽四年八月，奉梓宮還京師。并州總管漢王諒舉兵反，詔尚書左僕射楊素討平之。※高祖の死の直後にすでに反乱が起きていた。

※仁壽十一月丙申，發丁男數十萬掘塹，自龍門東接長平、汲郡，抵臨清關，度河，至浚儀、襄城，達於上洛，以置關防。

※大業元年三月丁未，詔尚書令楊素、納言楊達、將作大匠宇文愷營建東京，徙豫州郭下居人以實之。辛亥，發河南諸郡男女百餘萬，開通濟渠，自西苑引穀、洛水達于河，自板渚引河通于淮。大業二年春正月辛酉，東京成。

2：大業元年夏四月癸亥，大將軍劉方擊林邑，破之。

3：大業三年春正月癸亥，勅并州逆黨已流配而逃亡者，所獲之處，即宜斬決。

※大業三年秋七月發丁男百餘萬築長城，西距榆林，東至紫河，一旬而罷，[6]死者十五六。
※大業四年春正月乙巳，詔發河北諸郡男女百餘萬開永濟渠，引沁水南達于河，北通涿郡。

※はこの状況の中で煬帝が長大な堀を掘ったり、東京の造営を行ったり、百万の人を動員して運河を掘ったり、長城を修復したりと反乱と戦乱が続く中での大工事だったことを示している。これでは国内情勢は悪化するだけ。

しかも周辺諸国の動きが不気味だ。みな様子を見ている。

そこで煬帝は動いた。周辺諸国を脅しにかかったのだ。

※大業三年三月壬子，以大將軍姚辯為左屯衛將軍。癸丑，遣羽騎尉朱寬使於流求國。

※▼大業三年八月上謂高麗使者曰：「歸語爾王，當早來朝見。不然者，吾與啟民巡彼土矣。」

琉球に將軍を送り、さらに使いを久しぶりに送ってきた高麗を脅す。

高麗が使いを出したのは7年ぶり。高麗王が早急に朝見しないならば、攻めるぞと、煬帝は高麗使節に言明。

●この大業三年にタイ国は二度目の遣使。ここで対等外交を要求。

タイ国は隋朝の衰退ぶりを見たうえで、対等外交を要求したのだ。あの有名な「日出るところの天子、日没するところの天子に書を致す・・・」と。煬帝が無礼だと激怒するわけです。

一方で百済や倭が別の行動をとる。百済遣使には★を倭国遣使には■を付けた。

★■大業四年三月壬戌，百濟、倭、赤土、迦羅舍國並遣使貢方物。

百済遣使は26年ぶり。明らかに百済は隋を軽視していた。倭は初めて。タイ国が対等外交を要求した翌年に倭は隋に朝貢。このねらいは何か？

この辺りは百済と高麗・新羅との関係を見ないとわからない。隋朝を百済周辺諸国との争いに利用しようとの思惑だろうか。そして倭は。

倭が近畿天皇家だとすると、タイ国からの自立を図ろうとの動きと考えられる。列島宗主国のタイ国は隋と対等と主張。その傘下の倭国は隋に朝貢。

この倭国の動き（百済や加羅の動きも）は隋の煬帝を大変喜ばせたことであろう。なぜなら西方の雄・突厥とは戦になり、東方の雄・高麗は不気味に沈黙を守っている。そして高麗と朝鮮半島を争ってきたさらに東方の雄・タイ国は対等外交を要求してくる。

煬帝は内憂外患の最中。

こんなときに高麗のさらに東方から百済と加羅と倭が朝貢してくる。隋にとってなんと喜ばしいことか。

これが煬帝が倭国の王推古に対して使節に国書を持たせ、倭国使節をわざわざ送らせた

背景であると考える。

帝紀を見ると同じころ、突厥のさらに西方にある国が隋に朝貢してきている。高昌である。

※大業五年夏四月己亥，大獵於隴西。壬寅，高昌、吐谷渾、伊吾並遣使來朝。

※大業五年六月壬子，高昌王麴伯雅來朝，伊吾吐屯設等獻西域數千里之地。上大悅。

煬帝は非常に喜びその使節を歓待している。きっと倭国使節小野妹子も同様な待遇であっただろう。

そしてなおも隋の内外の情勢は不安定。

一つ気になる記事があった。反乱記事ではないのだが。

●大業五年夏四月癸亥，出臨津關，渡黃河，至西平，陳兵講武。

この記事の「陳兵」とは何であろうか？ 陳とは隋が滅ぼした南朝の王朝である。ついに江南地方の反乱は、陳朝を復興しようとの動きに至ったのだろうか。

大業五年とは、推古紀に、百済が呉に使いを送ったがその地に乱がおき使節は戻ろうとして、途中嵐に合い日本に流れ着いたとの記事があった、その年である。

そして隋国内の不安定な情勢はまだ続く。

4：大業五年丙戌，梁浩臺，御馬度而橋壞，斬朝散大夫黃亘及督役者九人。吐谷渾王率眾保覆袁川，帝分命內史元壽南屯金山，兵部尚書段文振北屯雪山，太僕卿楊義臣，東屯琵琶峽，將軍張壽西屯泥嶺，四面圍之。渾主伏允以數十騎遁出，遣其名王詐稱伏允，保車我真山。壬辰，詔右屯衛大將軍張定和往捕之。定和挺身挑戰，為賊所殺。亞將柳武建擊破之，斬首數百級。甲午，其仙頭王被圍窮蹙，率男女十餘萬口來降。

5：大業六年春正月癸亥朔，旦，有盜數十人，皆素冠練衣，焚香持華，自稱彌勒佛，入自建國門。監門者皆稽首。既而奪衛士仗，將為亂。齊王暕遇而斬之。於是都下大索，與相連坐者千餘家。

この中に一つ気になる記事がある。

●大業六年夏四月丁未，宴江淮已南父老，頒賜各有差。

江南地方の父老に饗応してそれぞれに方物を下賜。何のため？江南地方はいまだ不安定だということか。

そして倭国の二度目の遣使。

■大業六年春正月己丑，倭國遣使貢方物。

倭国遣使の前は、西方の異民族の国が次々と離反。隋はその討伐に難儀。そんなときに、西からは遠く高昌が遣使、次いで東からは遠く倭国が遣使。煬帝はさぞ喜んだことであろう。

こうした内外の不安定な状況の中で、煬帝はついに対外遠征に打って出た。

それが琉球侵攻と高麗侵攻である。

※大業六年二月乙巳、武賁郎將陳稜、朝請大夫張鎮州擊流求、破之、獻俘萬七千口、頒賜百官。

倭が朝貢した翌月に隋は、タイ国南方の流求を討ち、1万7千余人を捕虜とした。

さらに、高麗を何度も討った。

大業七年二月壬午、詔曰：「武有七德、先之以安民。政有六本、興之以教義。高麗高元、虧失藩禮、將欲問罪遼左、恢宣勝略。雖懷伐國、仍事省方。今往涿郡、巡撫民俗。其河北諸郡及山西、山東年九十已上者、版授太守；八十者、授縣令。」

高麗出兵を煬帝は宣言した。

※大業八年春正月、高麗征討の詔を發し、總一百一十三萬三千八百、號二百萬、其餽運者倍之。癸未、第一軍發、終四十日、引師乃盡、旌旗亘千里。近古出師之盛、未之有也。しかし激戦となり将帥も次々と戦死。煬帝は「六月己未、幸遼東、責怒諸將。」するも「七月壬寅、宇文述等敗績于薩水、右屯衛將軍辛世雄死之。九軍並陷、將帥奔還亡者二千餘騎」となり、軍を引いた。十一月には敗軍の将を民に降格させ、多くの将士を斬った。

※大業九年二月、壬午、宇文述等官爵。又徵兵討高麗。しかし六月「戊辰、兵部侍郎斛斯政奔于高麗。」と自軍から裏切りが起こり、「庚午、上班師。高麗犯後軍」、軍を返すも、後軍を高麗軍に冒される始末。

※大業十年秋七月甲子、高麗遣使請降、囚送斛斯政。上大悅。

こうして煬帝は高麗を攻め落とすこともできず、隋の内外情勢はさらに悪化し、隋末の混乱期に入っていくのだ。

この情勢中で、高麗もタイ国も隋にまったく遣使せず、あれほどすり寄った倭国も遣使していないのだが、なんと混乱した情勢の中で、百済と新羅とが別々に遣使していることが気になる。

★大業七年二月百済遣使朝貢。

●大業十一年春正月甲午朔、大宴百僚。突厥、新羅、靺鞨、畢大辭、訶咄、傳越、烏那曷、波臘、吐火羅、俱慮建、忽論、靺鞨、訶多、沛汗、龜茲、疎勒、于闐、安國、曹國、何國、穆國、畢、衣密、失范延、伽折、契丹等國並遣使朝貢。

以上のように隋の内外情勢は理解できる。

この認識を背景にしないと、隋書帝紀の「大業四年・六年倭国遣使」の意味とその実態

も、そして隋書東夷伝タイ国伝の記事も理解できないと思われます。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月17日(日)16時12分

川瀬さんへ

●9月17日に付けコメントで詳しい隋を巡る国際情勢を御指摘いただき有難うございました。

隋については、基本的には、「科挙による人材の登用、律令制を完成し、強力な国家を樹立した。しかし高句麗との戦争と、大運河建設など相次ぐ土木事業で国が疲弊していった」との認識で、また個々の出来事は一般書を通じてしか理解していなかったのですが、隋書本紀を原文で詳しく見ていくという手法は絶対に必要ですね。小生も是非取り入れていきたいと思っています。

ただ、推古紀の外交記事を隋の時代とするには、やはり理解できないところがあります。

1) 隋は推古の朝廷を「倭国」と認識していたのか

隋書倭国伝の冒頭に「倭国は光武帝の倭奴国以来、中国に朝貢してきた国である」と記されています。何故「倭国」と記したのかは、古田先生が指摘されたように多利思北孤が「大倭国」と自国を称したので、同音に卑字を当てて「倭国」としたとする仮説が正しいと思います。

また近畿天皇家もその時代自分たちを「倭国」と呼び、多利思北孤の「大倭国」とは別の国であるとしていた史料根拠はないと思います。

この時代、近畿天皇家は自分たちのことを何といていたのでしょうか、全く分かっていません。すくなくとも「倭国」と自稱していた痕跡は見つかっていないと思うのですが。

2) 隋書帝紀の記事

隋書帝紀には開皇二十年の倭国使者のこと、大業三年の倭国使者のこと、大業四年の裴世清の倭国訪問の記事、さらには大業二十年の推古紀の犬飼御田鍬の訪問記事も記されていません。

少なくとも裴世清を、煬帝に直結する秘書省の文林郎として、特別に日本列島に派遣したなら裴世清の記事は帝紀に記録されていると思うのですが。

一方帝紀には大業四年三月の倭国朝貢記事、大業六年の倭国朝貢記事があります。

四年三月の記事は前の年にきた多利思北孤の使者または小野妹子が残留して百済、赤土、迦羅舎と一緒に貢献した可能性があります。しかし大業六年の記事の場合は推古紀に何も記されていません。

これら隋書の帝紀と倭国伝の記述から、両書記事については個別に精査する必要があり、帝紀の記事が推古朝の遣隋使と判断するには疑問を感じたものです。

3) 推古の使者は何処を經由して中国へ行ったのか

倭国伝には「新羅、百済皆以倭為大國、多珍物、並敬仰之、恒通使往來」と記されています。新羅・百済のどちらかが、倭国との関係悪化を考慮せずに推古朝の隋との直接接触の労をとったのでしょうか、疑問に思います。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月19日(火) 19時57分

大下さんへ質問にお答えします

1) なぜ隋書はタイ国と倭国との二つの異なる表記をしたのでしょうか？

タイ国の表記は大倭国と国書にあったからそう表記したかもとの古田説は頷けます。そして隋書タイ国伝からはこの大倭国が古から通交してきた倭国であることも認識されています。ではどうして帝紀では倭国なのでしょう。やはり倭国とタイ国とは別国と考えるしかありません。

そして近畿天皇家が倭国と自称した史料としては、少しあとですが、孝徳紀に九州の難波長柄豊碓宮から中大兄らが元の近畿の宮にもどったときそこを「倭」の○○の宮と表記したことに示されています。そして対するタイ国は、百済などの国書に「日本国天皇」とあるのですから、遅くとも7世紀中ごろまでにはタイ国は日本国と、近畿天皇家は倭国と自称していたと考えられます。

また推古紀の大唐遣使の記事の中の中国の天子の国書に「倭皇」との呼称がありますが、これは近畿天皇家が倭国と自称していたことの証です。古田さんや大下さんのようにこの記事が12年さげたとしても、7世紀初頭にはすでに近畿天皇家の自称は倭国だったのです。

2) 隋書帝紀の記述法

> 一方帝紀には大業四年三月の倭国朝貢記事、大業六年の倭国朝貢記事があります。

四年三月の記事は前の年にきた多利思北孤の使者または小野妹子が残留して百済、赤土、

迦羅舍と一緒に貢献した可能性があります。

これは恣意的解釈です。多利思北孤の使者なら「タイ国」と表記します。

大業四年三月の倭国遣使記事が小野妹子が残留したものと理解するのでは、書紀推古紀記事が初唐だとした判断と矛盾しますよ。

でもこれは大業三年に派遣された小野妹子らが正式に隋の煬帝に拝謁したのが大業四年三月だと考えれば良いのです。そしてその直後に隋使斐世清らと倭国に戻った。

>しかし大業六年の記事の場合は推古紀に何も記されていません。

大業六年の倭国遣使は、大業四年9月に斐世清を送って再度隋に向かった小野妹子が帰国したのがその翌年大業五年の9月です。その際に通訳は隋に残留したと書紀記事にありますので、この通訳が翌年の正月の拝賀に参列したと理解すれば済むことです。

>少なくとも斐世清を、煬帝に直結する秘書省の文林郎として、特別に日本列島に派遣したなら斐世清の記事は帝紀に記録されていると思うのですが。

日本列島の代表王朝ではない倭国にわざわざ隋皇帝が使節を送ったなど記されるわけがありません。代表王朝である大倭国が隋に従わない姿勢を見せていて統御できないから、その分国と思われる倭国が朝貢してきたので喜んでそれに乗るなど。隋の皇帝としては屈辱でしかないでしょ。

3) 推古の使者は何処を經由して中国へ行ったのか

私はタイ国も公認しての隋遣使だったと思います。そうでなければタイ国に来た隋使斐世清を公然と飛鳥に招くことはできないはずですね。書紀には隋使斐世清を招くためにわざわざ筑紫まで難波吉士雄成を派遣したとあるではありませんか。

分王国の近畿天皇家と対外方針が異なることを知りながら、隋の内情を知るための一つの方策として、また隋と決裂したときの次善の策として、近畿天皇家が独自に隋と通交することを認めたのだと思いますよ。

だから当然推古の使節は百済經由で隋に行ったはずですよ。

これはずっとそのあとまで続きます。

孝徳紀の白雉四年に大唐遣使記事があるのですが、なんと二組の使節が派遣されたことが記されています。そして一方は無事に唐について皇帝に謁見して戻ってきたが、他方は薩摩の方で難船したとあります。無事唐についたのが倭国・近畿天皇家の使節で、これは正式には「西海使」と呼ばれていたようです。そして薩摩で難船したのがタイ国・九州王朝・日本国の遣唐使です。唐ともぶつかって直接遣使できないので新羅經由だったけど、その新羅ともぶつかり始めたのでやむなく直接東シナ海を横断する道を選んで失敗したの

ではないでしょうか。

以後斉明紀を精査してみると、近畿天皇家の西海使と九州王朝の遣唐使が並行して派遣され、これが唐との激突がまじかに迫った時期には近畿天皇家の西海使と九州王朝の遣唐使が唐朝で衝突して両者ともに罪を得、百済侵攻を控えた唐朝によって軟禁されるという事件に発展したものと思われます。

なお大業二十年の推古紀の犬上御田鍬の訪問記事は、次の舒明期の犬上御田鍬の訪問記事とともに、近畿天皇家の記事ではなく、九州王朝があきらめずに隋にそして唐に遣使したものと判断しています。

この舒明紀の犬上御田鍬は唐使高表仁とともに帰国したものですから、旧唐書倭国伝にある倭国の貞観五年の遣使記事と一体のものとする必要があります。

犬上御田鍬は舒明二年・貞観4年に遣使していますが、正式に唐の皇帝に会えたのは翌年の5年だったと思われます。そして唐使を伴って帰国したのはさらにその翌年の貞観6年・舒明4年。この時に唐使は王子と礼を争って朝命を告げられずとあります。

そして書紀舒明紀では、この時も近畿天皇家は筑紫まで唐使を迎えに行きます。「天子の所に唐使が来ていると聞いたのでお迎えに」と告げています。

この時の唐使の動きは、推古紀のときの隋使の動きと相似形をなしています。

そしてこのときも九州王朝は、近畿天皇家が独自に唐朝と通交することを認めています。これも推古紀大唐遣使記事を考えるときに参考にすべきです。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月20日(水)00時05分

★古田説の再検討

以上のように隋の内外情勢を捉えてみると、書紀推古紀の大唐遣使記事が、十二年あとの初唐期の大唐遣使記事であったという古田説の根幹が揺らいでくるのである。

古田説の根拠の一つが、推古紀十七年の「百済王命じて呉国に遣わす。其の国、乱れ有りて入ることを得ず……」の記事が不審であるとしたことと、推古紀に出てくる大唐の皇帝の国書中に出てくる「宝命」という語の使用が、二代皇帝煬帝では不審だということであったからだ。

この二つを再検討しておこう。

a) 百済の呉国遣使記事について

推古十七年は、隋の大業五年にあたる。この年の書紀推古紀に次のような記事が見られ

る。

この年の夏四月に、筑紫大宰が奏上して言うに「百濟僧道欣・惠彌爲首一十人・俗七十五人が肥後国の葦北の津に泊まっている」と。この時、難波吉士德摩呂・船史龍を派遣してこれらに問うて曰く。「何故来るや」と。これに対して曰く「「百濟王命以遣於吳國、其國有亂不得入。更返於本郷、忽逢暴風、漂蕩海中。然、有大幸而泊于聖帝之邊境、以歡喜。」と。

つまり「百濟王命をもって吳国に派遣されたが、その国に乱れ有って入国することができず、さらに本郷に戻るとき、たちまち暴風にあつて海中を漂う。しかし幸いなことに、聖帝の辺境に流れ着いて止まることができ、大変喜んでいる」と。

これは倭国が「大唐」の使人斐世清を再度小野妹子らが中国に送った推古十六年の翌年にあたるわけだが、古田さんは、当時は中国江南の地に吳国は存在せず、隋書や旧唐書を見ると、この地に吳国が出現したのは、唐の高祖の武徳四年（621年）九月のことであるので、この記事は12年遡ってこの場所に入れられていると判断し、その直前にある大唐遣使記事もまた、12年遡って入れられたと判断したわけだ。

●不安定な隋の江南支配：

しかし先の記事に見たように、隋が開皇十年（590年）に江南の陳を滅ぼし、さらにその南の越も滅ぼして中国を統一したかに見えたが、この江南の地はこれで治まったわけではなく、以後もずっと反乱が絶えなかったことが明らかになった。

その特徴的な事件は、開皇十八年春正月辛丑、詔曰：「吳、越之人，往承弊俗，所在之處，私造大船，因相聚結，致有侵害。其江南諸州，人間有船長三丈已上，悉括入官。」

吳や越では「弊俗」を往承、すなわちいまだに陳や越の統治を慕って、大船を建造し衆を結んで隋の地を犯していると。隋による陳の討伐から八年、いまだにその故地である吳の地は安定せず、その南の越の地も安定していなかったのだ。

そしてこの傾向は隋の二代煬帝の時代になっても続いていた形跡がある。

一つは、「大業五年夏四月癸亥，出臨津關，渡黃河，至西平，陳兵講武。」の記事。

この記事の「陳兵」とは何であろうか？ 陳とは隋が滅ぼした南朝の王朝である。ついに江南地方の反乱は、陳朝を復興しようとの動きに至ったのだろうか。

さらには、「大業六年夏四月丁未，宴江淮已南父老，頒賜各有差。」の記事。

江南地方の父老に饗応してそれぞれに方物を下賜。何のため？ 江南地方はいまだ不安定だということか。

こういう状況によって、隋が陳や越を滅ぼして江南地方を平定し、中国の統一を果たしてから、かれこれ十五・六年も経っているのに、江南地方が不安定であったと思われる。

したがって推古十七年・大業五年の当時に、江南地方に吳を名乗る国が出現し、そこに百濟が遣使しようとしたが、この地に乱が興って入国できず、帰国の途についた百濟の使船が嵐にあつて、九州に漂着した可能性も排除できないのだ。中国の正史に吳国の存在が

記録されないからといって、それが存在しなかったことの証明にはならない。

●百済が隋に遣使した意味：

さらにこの記事の真偽を考える際に注意したいのは、なぜ百済が隋に遣使したかということである。その意図を正確につかんで置くことは大事である。

まず百済の隋遣使の年次を順を追って確認しておこう。

・一回目：「開皇元年（581年）冬十月乙酉，百済王扶餘昌遣使來賀，授昌上開府、儀同三司、帶方郡公。」

隋朝が成立したのはこの年の二月。直後に百済王は遣使し、王朝成立を賀した。

・二回目：「開皇二年（582年）春正月辛未，高麗、百済並遣使貢方物。」

百済と高麗が共に遣使し朝貢した。高麗はこの前年の十二月に最初の遣使をしている。

・三回目：これは帝紀には記されていないが、東夷伝百済伝に記されている。「開皇十八年，昌使其長史王辯那來獻方物，屬興遼東之役，遣使奉表」。

そしてこの時の遣使の特徴的なことは、ちょうど隋は高麗を討とうとしていた時で、これに対して百済使は「請爲軍導」、すなわち隋軍を先導することを請うたというのだ。この時は隋の高祖が、「高麗は暦年貢物も奉らず臣下の礼を取らないので将に命じてこれを討とうとしたところ、高麗王高元が恐れかきこまって帰服してきたので朕はこれを許し、討つことを辞めた」と伝えたので、隋軍先導の話はなくなったと百済伝は記す。

ここで記憶しておくべきことは、この事実を高麗が知って、「以兵侵掠其境」、すなわち百済との国境地帯を犯したということだ。

・四回目：「大業四年（608年）三月壬戌，百済、倭、赤土、迦羅舍國並遣使貢方物。」

百済の隋遣使は、なんと二十六年ぶり。

そしてこの四回目の遣使に続いて、同じ年にまた百済は遣使し、しかも「請討高麗」したと。なんと高麗を討つことを隋に請うたというのだ。これに対して隋は、「煬帝許之，令覘高麗動靜」、隋皇帝煬帝はこれを受け入れ、高麗の動静を伺うことを百済に命じたというのだ。しかし東夷伝百済伝はそのあとに続けてこう記す。「然璋内與高麗通和，挾詐以窺中國」。すなわち百済王余璋は密かに高麗と内通し、虚言を弄して中国を窺ったと。

なんと百済は自ら隋に高麗征討を進言しておきながら、高麗と内通し隋の動きを伺ったと。

・五回目：「大業七年（611年）二月百済遣使朝貢。」

これは煬帝が高麗征討を宣言した年である。

この五回目の遣使については東夷伝百済伝が詳しい。

「大業七年，帝親征高麗，璋使其臣國智牟來請軍期。帝大悅，厚加賞錫，遣尚書起部郎席律詣百済，與相知。」と。

すなわち煬帝が自ら高麗征討に赴いた折に、百済王余璋は使節を送り、軍期を請うと。

「軍期」とは何だろうか。「期」の字には「会う」という意味がある。共に高麗征討の軍を興し、会いまみえんという意味だろうか。煬帝は大いに喜び百済王への恩賞や爵位を与えたうえで、「尚書起部郎」の「席律」を百済に向かわせ、「與相知」と。大いに友好関係を温めたという意味であろうか。

「尚書起部郎」とは、軍事を司る省である尚書省の起部、すなわち高祖の時代は工部と呼ばれた工兵部門の長である。位は正四品。かなりの高官である。隋の工兵部門の長を百済に派遣し、高麗征討の実際を打ち合わせたということか。

そして翌年大業八年に隋の六軍が国境の遼河を渡るや、百済王余璋は高麗の南の国境を軍で固め、隋への援軍を呼号したと。

しかしこの時の征討は隋の敗北に終わり、翌年大業九年の二度目の征討も自軍から裏切りが起きて敗北した。

・六回目：「大業十年，復遣使朝貢。」この記事も帝紀にはない。東夷伝百済紀の隋の高麗征討記事の次に記録されている。

この年を帝紀と高麗伝で確認すると、三度目の高麗征討が行われた年である。

二月に征討の軍を興したものの、盗賊蜂起に会い、兵士の多くが逃亡し所在不明となり、軍の多くが進軍の時期を失いながらも、ようやく高麗国境の遼水に至ったと。これでは征討も覚束ない。

ところが高麗の方から服属を誓ってきた。

「大業十年秋七月甲子，高麗遣使請降，囚送斛斯政。上大悅。」

煬帝は大いに喜んだのだが、東夷伝高麗伝は、この事情を以下のように記す。「高麗亦困弊」と。

大業十年の百済遣使は、三度目の高麗征討と関わってのことであっただろう。ただしどのように関わったかは不明である。

そしてこれを最後にして隋への百済遣使は途絶える。東夷伝百済伝は、「後天下亂，使命遂絶。」と伝える。

以上のように百済遣使の背景を、帝紀と東夷伝の記述から調べてみると、これは北の隣国高麗との関わりであることに気が付く。

しかも隋の高祖の代に高麗を討とうとした際に百済は高麗征討を先導すると申し出た。

そしてこれから二十六年も空いた大業四年に遣使した時には、百済の方から高麗征討を持ちかけておきながら、裏で高麗と通じていたが、大業七年に煬帝が高麗征討を宣言した際には、百済王が援軍を申し出て、実際翌年隋が高麗征討を行った際には、百済は高麗国境を軍で固めて隋への援軍を呼号したのだ。

高麗と結んで唐を騙したり、唐と結んで高麗を討とうとしたり。百済の隋遣使の裏側には、両極端に揺れる高麗との関係があったのである。

これは何のためだろうか。

答えは東夷伝百済伝に記されていた。

大業八年の高麗征討の折に、実際に百済が高麗国境を軍で固めた際に、隋が両極端に動く其の訳を聞いたのだ。

「實持兩端。尋與新羅有隙，每相戰爭。」

新羅と対立し、度々戦争を構えているからというのがその回答であった。

百済はその東側に国境を接する新羅と対立し戦争を続けている。だから北側を安泰にするために、高麗と結んだり、唐と結んで高麗を討ったりしたというのだ。

この間の事情は同じ東夷伝の新羅伝にある。

新羅は元々は百済に附庸していた国である。しかし百済が高麗を攻めたことで、高麗は逆に百済を攻めてこれを帰服させた。この際に新羅は高麗と結んで百済を攻めた。これにより新羅の勢いが盛んになり、百済を襲って加羅国を百済から奪い、その附庸国としたと。

このあたりの事情は書紀にも詳しい。

新羅が加羅諸国を百済から奪いとったのは、欽明二十三年（562年）の事である。「廿三年春正月、新羅打滅任那官家。一本云、廿一年、任那滅焉。總言任那、別言加羅國・安羅國・斯二岐國・多羅國・卒麻國・古嗟國・子他國・散半下國・乞滄國・稔禮國、合十國。」と書紀は記す。

しかもこれによって加羅諸国にあった倭国の任那官家も滅ぼされ、新羅は倭国とも戦ってこれを奪い取ったのだ。以後百済と倭国は共同して、任那復興を図る。百済は倭国に朝貢しその協力を仰いだのだ。

倭国や倭国が隋に遣使した大業三年・四年の少し前の時期には、倭国は新羅と戦い新羅の五城を攻略（推古八年・600年）。

「八年春二月、新羅與任那相攻。天皇欲救任那。是歲、命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍並闕名、則將萬餘衆爲任那擊新羅。於是、直指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、攻五城而拔。於是、新羅王、惶之舉白旗、到于將軍之麾下而立。割多々羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南加羅・阿羅々六城以請服。」と書紀は記している。そしてさらに新羅を討とうとした（推古九年・601年）。

「三月甲申朔戊子、遣大伴連嚙于高麗、遣坂本臣糠手于百濟、以詔之曰、急救任那。冬十一月庚辰朔甲申、議攻新羅。」と書紀は記す。高麗と百済に使臣を送り共に任那を救うことを要請し、これがかなわなかったからか、十一月には倭国単独で新羅を討つことを決定。

この時、倭国は倭国（推古朝）にも援兵を要請し、倭国軍2万5千も筑紫に集結した（推古十年・602年）。

「十年春二月己酉朔、來目皇子、爲擊新羅將軍、授諸神部及國造伴造等并軍衆二萬五千人。夏四月戊申朔、將軍來目皇子到于筑紫、乃進屯嶋郡而聚船舶運軍糧。六月丁未朔己酉、大伴連嚙・坂本臣糠手共至自百濟、是時、來目皇子臥病以不果征討。」と書紀は記す。

この新羅征討は、倭国の征新羅將軍が相次いで病に倒れたために中止になったようである。

大業四年。百済が二十六年ぶりに隋に遣使し高麗征討を要請した時期とは、まさに百済と倭国が共同して新羅を攻め、加羅諸国を取り返そうとしていた時だったのだ。

しかし頼みにした隋の内情も怪しく、その江南地方支配は未だ安定せず、各地には陳や越の支配を懐かしむ諸豪族の反乱も続いていた。そんな中で、江南地方に呉を名乗る国が出現したとしたら、百済はその呉の国にも朝貢して西の備えとしようとしたに違いないのである。

隋朝の江南支配の不安定さと、百済の隋遣使の目的、すなわち新羅との戦いを抱え倭国と共同して任那復興を図る百済にとって、隋との通交とは、これによって北の大国高麗の力を弱め、東に専念するための方便だったということを考えあわせたとき、推古十七年(609年=大業五年)の百済の呉国遣使は、充分にあり得る話なのである。

この記事が12年後の初唐期の記事を遡らせたものとの古田さんの推論は成り立たない。

ちなみに、以上のように隋と百済とを巡る国際関係の復元は、隋書の帝紀と東夷伝、そして書紀に依っている。これらの史料は古田さんも当然目にしていたはずであるのに、なぜこのことに気が付かれなかったのか。これは古田さんの主たる関心が、隋書東夷伝倭国伝の記事が、近畿天皇家のことではなく、九州王朝のことであることを明らかにすることにあつたため、隋の二代煬帝の時代の国際関係の中にこの記事を書いて考えるという視点を、古田さんが持たなかったためだと考えられる。

ちなみにもう一つ付言しておく、問題となっている書紀推古紀十七年の百済船漂着とその船が呉国へ遣使の船で帰路に嵐にあつたとの記事は、九州王朝=倭国の史書からの盗用である。なぜならば百済船が漂着した場所は、肥後国葦北津とあるからだ。

また新羅征討のために來目皇子に2万5千の軍を付けて筑紫に派遣した記事は、近畿天皇家=倭国の記事である。理由は、派遣された場所が筑紫であることと、來目皇子病死の後に新たに征新羅将軍に任命された當麻皇子が、筑紫に向かう際に、途中の播磨で妻が病死したとあり、その妻を埋葬した場所が「赤石檜笠岡上」と明記されているからである。

書紀推古紀もまた、九州王朝の史書からの盗用箇所と、近畿天皇家自身の記録とが混在している。このこともこの記録を見て歴史復元に利用する際には、気を付けねばならないことである。

「宝命」問題については項を改めて論じる。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月25日(月)13時24分

川瀬さんへ

RE:「推古紀の新羅征討記事」

川瀬さんの25日付コメントで推古8（600）年からの新羅征討記事が述べられています。

小生はこの記事について下記①～④；

① 倭国の任那救援のための朝鮮半島出兵は六世紀前半で終り、任那は消滅した。六世紀に入ると、任那地区の遺物から倭系統のものが消え、新羅色が強くなる。六世紀後半には「任那」は存在していなかった。

② 書紀においても、敏達紀（572年～）から朝鮮での戦闘記事が消える。推古紀の出兵記事は前後の記事と脈絡が繋がらず、それだけが孤立した記事となっている。

③ 三国史記・新羅本紀においても、五世紀には倭兵の記事が多く記されていたが六世紀には倭兵侵攻の記事は無くなる。600年頃の記事に倭との戦闘記録は記されていない。

④ 隋書倭国伝においても、「兵あれど征戦なし」「新羅・百濟、皆倭を以って大国・・・、これを敬仰し、恒に通使・往来す」と記されていること。隋書は倭国は海外出兵はしていなかったことを証言している。

の事柄から、この時代（七世紀初頭）に倭軍の朝鮮出兵の事実はなかったと考えています。

従って推古8～11年の一連の新羅遠征記事は、まだ任那が存在していたころの半島出兵記事が何らかの理由で推古紀に紛れ込んだものと思っています。

古田先生は「日本書紀はまずは記されている通りに読むが、記事内容の信憑性については、外国の文献や考古史料と必ず検証することが必要」と言われていました。小生もその通りと思っています。

今回のテーマになっている「呉国」、「任那」についてはキーポイントになる固有名詞なので、これを「推定で、この時代に存在したであろう」とするのではなく、きちんと検証すべきと考えています。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月27日（水）20時40分

●推古8～11年の一連の新羅遠征記事

本当にこの記事は前後の書紀記事から孤立しているのだろうか。

書紀宣化二年にすでに任那救援の記事有。欽明五年にも任那復興の会議記事あり。

そして敏達十二年にもまた任那復興の詔がある。さらに崇峻四年にも任那復興を議するとの記事がある。

また推古八年には新羅と任那が相攻めあうの記事があつて、任那救援のために新羅征討が挙行される。

こうやって書紀記事を追っていくと、決して推古紀新羅征討記事は孤立してはいない。

しかし任那とは加羅諸国などの総称であることは、欽明二十三年の任那官家滅亡記事にあきらか。曰く「總言任那、別言加羅國・安羅國・斯二岐國・多羅國・卒麻國・古嗟國・子他國・散半下國・乞漚國・稔禮國、合十國。」と。

だから任那復興とか救援とか言っても、具体的にどこの国を指すかは不明。

したがって大下さんが任那は六世紀前半にはすでにないと断じていることは、根拠がないわけ。その任那の実態をどうとらえるかが問題だ。欽明二十三年の記事は、総称として任那とされていた地方の倭国の官家が滅びたということだけで、それ以外の任那とされていた諸国の一部はまだ新羅に併合されずに残っていたと考えることができます。

●三国史記記事の信憑性

三国史記は新羅を受けて成立した高麗の時代の史書。たしか13世紀成立ではなかったか。その大義名分は、むかしより新羅こそが朝鮮半島の王者だと。だから高句麗や百済はそれに従わない国との位置づけ。そして倭は、新羅の辺境を襲う賊との位置づけ。

だから新羅本紀では倭国とは一度も記されていない。倭が出てきてもいつも「倭人」か「倭」だ。国家としての倭の存在は無視されている。

これは高句麗の好太王の碑文と同じ書き方。

百済の聖明王が戦死した眞興王十五年 秋七月の記事でも、書紀ではここに倭軍が参加していることは人名も挙げて記しているが、倭軍の存在は一言も記さない。

さらに、眞興王二十三年には九月に加耶叛 王命異斯夫討之の記事だけでも、書紀によると、紀男麻呂宿禰や河邊臣瓊缶を将軍とする軍が任那に出陣し、新羅兵と激戦を演じるも、三国史記では倭軍のことは皆無。

また隋書倭国伝で新羅が倭国に使いを送っていたと書かれた時代の新羅王・真平王の時代。三国史記新羅本紀にはまったく倭国遣使は出てこない。ここでも国家としての倭国は無視。

そして百済滅亡と再興百済滅亡のときの新羅王・武烈王や文武王の記事でも、百済が唐

によって滅ぼされたことは記しても、百済をそして再興百済を倭が支援して、唐・新羅連合軍とたたかったことも無視。

三国史記の記事で当時の新羅・倭関係を考えること自体が無理です。

●倭国伝記事について

たしかに倭国伝には、「雖有兵，無征戰。」と開皇 20 年の遣使記事のあとの倭国の記事の中にあり、「新羅、百濟皆以倭爲大國，多珍物，並敬仰之，恆通使往來。」ともあります。

この記事の依拠したものは一体なんだったのでしょうか。開皇 20 年の記事は、隋に来た倭国の使いに問いただして得た記録が元なのではないのでしょうか。そして実際に隋の使いが倭国に行って王とも会ってきた記録に基づいて書かれたのが大業三年遣使記事と翌年の隋使派遣記事だが、ここにはこうした記録はまったくない。

倭国伝冒頭のこの短い記録だけで、当時の倭国と新羅との関係を知るのは無理だと思います。

書紀記事と外国の記事とを照らし合わせることは大事ですが、その外国の史書の信憑性もまた問題にしなければいけません。

そして書紀は 8 世紀の成立の史書。隋書や旧唐書とはほぼ同時代。それもかなり半島諸国との関係については隋書や旧唐書よりはるかに詳しい。これは当たり前。当事者の記録なのだから。中国史書はその王朝の事績を記したもので、必要な範囲でしか、遣使してきた外国同士の関係は記さない。

そして残念ながら同時代の朝鮮の国による史書は存在しない。

したがって同時代に近い書紀の記事を無視して、ずっと後世の二次史料である三国史記を重視してはいけないと思います。

したがって書紀推古紀 8 年以後の新羅征討記事が、ずっと前の記事が紛れ込んだとの大下さんの判断自身が根拠がないと思います。

おそらくこの時期の書紀の記事は年次が大幅にずれているという古田説が発想の根拠だと思います。

●呉国について

わたしは隋末に呉国があったとは言っていない。隋書に呉国の記録がないからといって、その時代に呉と名乗った国がなかったとは言えないと言っただけ。

そしてこれは、古田さんの隋朝についての認識がおかしいということをはっきりさせるために、隋朝の内外情勢を詳しく見ただけ。

おそらく隋末に呉という国があったということは証明できないと思いますが、なかったということも証明できないと思います。残された史料は限られているのですから。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月28日(木)00時45分

★古田説の再検討2

2)宝命問題について

書紀推古紀の「大唐」遣使記事の中に、使節斐世清がもたらした国書の文面が引用されている。

すなわち、「皇帝問倭皇。使人長吏大禮蘇因高等至具懷。朕、欽承寶命、臨仰區宇、思弘德化、覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇。知皇介居海表、撫寧民庶、境内安樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢。丹款之美、朕有嘉焉。稍暄、比如常也。故、遣鴻臚寺掌客裴世清等、稍宣往意、并送物如別。」と。

古田さんはこの国書の冒頭に記された「朕、欽承寶命、臨仰區宇」の語の「宝命」という用語の使用の仕方に不審があったとした。

つまり、宝命とは天命の事である。これは「書経」の「嗚呼、天の降せし宝命を墮す無からんことを」に由来するとして、これは周の第一代皇帝の武帝の言葉を記録したものとした。したがってこの語は王朝の第一代にこそ相応しい語で、第二代にはありえないものだと断じた。

古田さんはこの論理に基づいて、国書中に「宝命を継承し」とした王朝第一代にこそ相応しい語を使用したこの国書は、隋朝第二代である煬帝の国書ではなく、唐の初代・高祖のものだとしたのだ。

しかしこの、宝命は王朝第一代にこそ相応しく、第二代にはあり得ないという古田さんの認識そのものが間違っていると思われる。

すなわち、隋の第二代皇帝煬帝の詔を見ていると、彼が父である初代皇帝高祖・文帝から継承したものに対して、「宝」や「景」という、尊いとか麗しいなどの修飾語句を付して使用していることが目立つからである。

すなわち、まず仁寿四年十一月。七月に帝位についての最初の詔には、「朕肅膺寶曆，纂臨萬邦」（朕、宝曆を肅膺し、纂ぎて万邦に臨む）と。

次に、位について翌年改元した、大業元年春正月の詔には、「朕嗣膺寶曆，撫育黎獻」（朕、宝曆を嗣膺し、黎献を撫育す）と。

さらに、大業十年二月。三度目の高麗征討を議した際に臣下が賛成しなかったことに対して出した詔では、「朕纂成寶業，君臨天下」（朕、宝業を纂成し、天下に君臨す）と。

以上三例が、父祖から受け継いだことに「宝」という「神聖なる」との修飾語を使った例である。

さらに「景」という、目出度いとか大きいとかの意味を持った修飾語を使った例としては、大業四年十月に、西方の雄・突厥との戦が続いて万里の長城を大修復したり、不安定な江南地方を治めるために黄河流域と長江流域をつなぐ大運河を建設したりした中で、王朝を断固として受け継ぐという意味を宣言した詔の中では、「朕嗣膺景業，傍求雅訓」（朕、景業を嗣膺し、その傍らで雅訓を求め）と、自らが受け継いだ天下統一事業を「大いなる」との意味の「景」の語で就職していた。

そしてもう一つ、大業八年正月の、高麗征討の詔の中には、「粵我有隋，誕膺靈命」（粵に我が有隋、誕れて靈命に膺り）と、隋朝が受けた天命を「靈」という、最高級の意味での「尊い」との意味をもつ「靈」の語で修飾していたのだ。

このように隋の二代皇帝煬帝は、事あるごとに、自らが父から継いだ皇帝としての地位を、「宝曆」「宝業」「景業」「靈命」というように、誇って見せていたのだ。

これは先に見たように、隋朝の支配は、高祖・文帝の開皇十年における中国統一の直後から不安定化し、陳や越の支配下にあった江南地方では反乱が相次ぎ、西方からは西方の雄・突厥がしばしば侵攻し、しかも東方の雄・高麗も不気味な沈黙を続ける中で、帝位を継承したものの、この状態は収まらず、これを打開するために従わない高麗を三度に渡って征討したが失敗すると危機的状況に、煬帝の治世はあったからだ。

こうした状況の中で、東の東海上の孤島である日本列島の、代表王朝である倭国のさらに東から朝貢してきた倭国に対して煬帝が送った国書の中に「宝命」を受け継いでいると高らかに宣言して見せたことは、煬帝にとってこそ相応しい語だと言えるのである。

煬帝がその詔の中に「宝曆」「宝業」「景業」「靈命」の語を使用していたことは、古田さんも認識していた。すなわちこの宝命問題を論じた箇所（『古代は輝いていたⅢ 法隆寺の中の九州王朝』1985年朝日新聞社刊のp220）には、私が示したすべての例が例示されていた。

しきりに煬帝がその父祖から受け継いだ帝位をこうした修飾語で誇って見せている状況を古田さんは確認しながらも、大業四年という時期はまだ煬帝の治世後半の混乱期ではなく、大運河を建設したりと絶頂の時期にあったとの認識から、煬帝がその治世を飾って見せている背景を見逃し、その結果、この推古紀大唐遣使記事の中の中国皇帝の国書は、隋煬帝のものではなく、初唐期、唐初代高祖の国書だと断じてしまったのだ。

国書に宝命の語があるという問題からも、書紀推古紀大唐遣使記事が、12年あとの初唐期における大唐遣使記事だとした古田説が間違いであることがわかる。

投稿：川瀬健一 | 2017年9月28日(木)17時05分

川瀬さんの宿題にはお答えできないでいて申し訳ありません。「宝命」の問題、あらためて古田先生の「日本書記の史料批判」をよみ直してみました。川瀬さん指摘の「靈命」は隋

の「太宗」に関するものです。このてん古田先生の誤読はないと思われます。

投稿：川瀬さん。上城です。 | 2017年9月30日(土) 12時50分

川瀬さんへ

RE：28日付の「宝命の問題」について

下記小生の意見をコメントします。

●「宝命」と「宝」について

「宝命を受け」とは、“天の命令を受けて”という意味で古田先生の言われるように、天命を受けて新王朝を創立した初代天子が使う特別なことばになり、「宝」の場合は形容詞的に使われると“天子のことに用いる接頭語”(いずれも諸橋大漢和辞典参照)で一般的に天子が使うことばとなります。

従って「宝命」は天の命を受けて新しい王朝を創った初代皇帝のみが使うことが出来、「宝」は二代目以降のどの皇帝が使ってもよいこととなります。

推古紀の場合には「大唐」の裴世清が持参した国書に「朕、宝命を受け」と記されているので、これは、普通に読んで“唐の初代皇帝の高祖李淵が裴世清に持たせた国書”と考えるのが自然と思います。

●『書紀』記事に、文章の内容と干支・時代に違いがある場合。

雄略紀の長文の遺詔は、『隋書』高祖文帝(楊堅)の詔勅の引き写しであることなどから、『日本書紀』記事に年代と文章の内容が一致しないことがあることは、明らかになっています。

推古紀の「遣唐使」記事もこれと同じように文章の内容と記載されている時代が合いません。

この場合、小生は原則的に文章の内容からその文章がどの時代のものか判断すべきと考えています。特に推古紀の干支の場合は一回りのズレの可能性が十分に考えられます。

「唐」を「隋」と読み替える(原文改訂)は、余ほどの明確な理由がなければしてはならないと考えています。

投稿： 大下隆司 | 2017年9月30日(土) 18時38分

大下さんに質問です。

>従って「宝命」は天の命を受けて新しい王朝を創った初代皇帝のみが使うことが出来

本当に「宝命」という語は王朝初代しか使ってはいけない語なのでしょうか。王朝初代が使うことが多いというにすぎないのが歴史的事実ではないでしょうか。

わたしはここは、こうした辞書的な判断ではなく、煬帝が置かれた特殊な状況で考えてみれば、煬帝が「宝命」との特殊な用語をあえて使ったことも理解できると考えたのです。

>原則的に文章の内容からその文章がどの時代のものか判断すべきと考えています

古田さんはこの逆をやりました。書紀の推古紀前後には記事が動いている可能性が高いとの判断が先にあり、これに基づいてみると、書紀の「大唐」国書の「宝命」の使用もおかしいし、斐世清の官位の問題もおかしいと。

私はこの古田さんの方法が間違っているとしましたのです。

わたしは自分が理解できない記事があるからといって、その記事の年代を変えてしまう古田さんや大下さんのやり方の方が歴史研究としてはおかしいと考えます。

これは古田さんがなんども批判した、原文改訂と同じく間違った方法だと思います。

書紀推古紀「大唐」遣使記事の「大唐」を「隋」と書き換える問題。

古田さんがこれは「大唐」で良いのだとした理由、書紀記事の12年移動が否定されれば、この記事が入っている年次にそって「隋」と書き換えることは理にかなっていません。

結局大下さんは、私の提起を無視していますね。私の問題提起全体に答えるのではなく、その部分部分を古田さんの理解に沿って「反論」しているだけ。

私は古田さんの書紀推古紀「大唐」遣使記事は12年あとの初唐期のものだとの理解そのものが間違いだとして問題提起しているのです。

その問題提起のポイントは。

1：古田さんの書紀記事12年移動説は恣意的ではないか。

2：古田さんは当時の隋が置かれた国内国際情勢を無視しているのではないか。

の二つです。

宝命問題と、斐世清の官位問題は、古田さんも言明されたように、付随的な問題です。

宝命問題・官位問題は、先の1・2の問題を検討したうえで論じるべき問題です。

12年移動の根拠として古田さんが挙げたのは、書紀推古紀の「百済の呉国遣使」記事と、書紀舒明紀の「百済義慈王が王子豊璋を人質として倭に送った」記事の二つでした。

呉国問題は、当時の国際情勢と隋の国内情勢を考えると当時中国江南部に呉国が一時的に存在した可能性を指摘しました。

そして三国史記で百済の動きを確認すると、この国は隋ができたときすぐ朝貢したのですが、同時に南朝陳への朝貢も続けていることが確認できました。

当然隋が危ないとみればすぐに乗り換えます。

また舒明紀の記事ですが、これも三国史記で百済の対外関係記事を精査してみると、百済が王子を人質として倭国に差し出すのは、義慈王のときよりも、その父の武王の時の方がふさわしい。

武王時代は、新羅と相攻防している段階で、だんだん百済が劣勢になるとき。しかし義慈王の段階では百済は防戦一方で、唐に調停を頼むほどの状況。

百済が王子を人質として倭国に送るのは、ぜひ援軍をしてほしいとのことですから、武王時代がふさわしい。

そしてのちに百済王子豊が百済王になったときの記事を書紀と三国史記で確認すると、「古王子豊」「故王子豊」となっていることを確認しました。

「故」を「亡き」と理解すると王子豊がすでに亡きになってしまうので、これは亡き王の王子の省略形だと思います。

つまり百済王子豊は義慈王の王子ではなく、亡き武王の王子。つまり義慈王の弟。だから書紀は「故」と使い、三国史記は「古」と使ったのだと思います。

とすれば王子豊を倭国に人質として送ったのは義慈王ではなく武王であり、その年次は書紀の年次で良いことになります。

したがって古田さんが書紀記事が12年ずれていると判断した二つの理由そのものが否定され、書紀推古紀「大唐」遣使記事は、隋遣使記事と理解できることになります。

この点では定説が正しいと思います。

ただし隋書にある倭国遣使記事とは別の、近畿天皇家、当時すでに「倭国」と名乗っていた豪族が、独自に隋と交渉を始めた記録と理解する点では、定説の隋書記事と同一視する理解は間違っています。

投稿：川瀬健一 | 2017年10月1日(日)18時25分

川瀬さんへ

RE:10月1日付け小生への質問について

<12年ズレ問題の出発点>

推古紀「遣唐使」記事の12年ズレについて、古田先生の論の出発点は、”推古紀に一貫して記された「大唐」という国名”にあります。

古田先生が推古紀「遣唐使」記事は唐代のものではないか、と疑問をもち、推古紀の「呉国」、舒明紀の「義慈王」そして「宝命」という天子しか使わない言葉から、それは12年後の出来事とされたものです。

古田先生は12年のズレを出発点として「遣隋使」を「遣唐使」とされたのではなく、推古紀に「遣唐使」と記されていたので、推古紀を吟味した結果として「12年のズレ」があったとされたものです。

小生もこの考え方が正しいと考えています。

<宝命について>

「推古紀」は“大唐の使い鴻臚寺掌客裴世清が唐の皇帝の書状を推古天皇に手渡した”としています。そしてこの中で「唐の初代皇帝が推古天皇に渡した国書の中で宝命という言葉を使った」のは自然な表現と思います。

この手紙を無理に（唐の高祖でなく）隋の煬帝が書いたものとして、そこに「宝命」はその天子でも使える一般的な言葉と考える、とするのは一種の「仮定の仮定」となり、その説は成り立たないと考えます。

中国は文字を大切にする国です。長い歴史と膨大な書物の中で例外的に変な使われ方がされる可能性があるとは思いますが、普通は文字・言葉をそれほどいい加減に扱っていないと考えています。文字・言葉の定義をいい加減でよいとするとどんな説でもでも作ることが可能となります。言葉の定義については『広辞苑』や『諸橋大漢和辞典』を基準にすべきと考えています。

<推古紀「遣唐使」記事>

『日本書紀』が出来たのは720年です。当然、唐への提出も考慮して正式の漢文で書かれています。その時に「隋の煬帝から受け取った国書」を「唐の高祖からもらった」とするような、すぐわかるような嘘を記したのでしょうか。隋の滅亡からわずか100年しか経過していません。当時の唐は白村江の対戦相手国であった「倭国」の情報を熟知していたと考えられます。

推古紀にある「国書」は記されている通りに「大唐」の高祖から受け取ったものと考えます。

「推古紀」で「隋」を「唐」と書き換えたとする理由について、唐に遠慮したなどの意見がありますが、「書紀」は嘘をついてまで遠慮したのでしょうか。隋書に男王と記されている倭国王は、「推古女帝では恥ずかしいので聖徳太子を天皇として紹介した」とする通説論者と同じような論理で、理解に苦しみます。

<年代移動の根拠>

年代移動の根拠については古田先生が「日本書紀の史料批判」『邪馬壱国の方法』に詳しく記されています。この説明だけで十分です。

「呉国」についても隋の最盛期にも江南に「呉国」があってもおかしくないだろうとするのは、史料根拠なき推定にすぎません。

また裴世清の職名も三国史記百濟本紀に「隋の文林郎裴世が倭国へ行くのに我が国の南を通った」との記述があります。この時裴世清は文林郎として倭国へ行ったと百濟でも認識しています。この倭国とは多利思北孤の大倭国です。隋の時代に裴世清が文林郎と鴻臚寺の職務を兼務していたとし、倭国へは文林郎として、倭国へは鴻臚寺掌客として行ったというのは史料根拠のない推定にすぎないと考えます。

<隋煬帝初期の頃の情勢>

川瀬さんは、周辺諸国の動きから、隋は煬帝の最初ころから混乱が起きていたように考えられていますが、隋の事績は前にも述べたように、人材の登用（科挙の採用）と官僚制を施行し国力を高め、首都・長城の建設、さらに大運河など大規模な土木工事を進め、そして数度に渡る高句麗遠征を行っています。

高句麗との戦いの敗戦がきっかけとなり、相次ぐ土木工事で疲弊していた民衆に不満が高まり、国内で大反乱が起き滅亡しますが、実績から見ると高祖から煬帝の初期ころは、対外的には若干の混乱はあったにせよ国内は安泰で国力は充実していたと思われます。

国内が混乱していればあれだけの事を興すことは不可能です。

<舒明紀の王子豊について>

小生が使っている『三国史記』は東洋文庫のもので、原文はありませんが、井上秀雄氏の訳注では、660年の百濟滅亡以降、それまでの「百濟」は「旧百濟」と名前が変えられています。

豊璋も旧百濟王子と記されています。これは旧百濟国の王子と言う意味です。これを義慈王の王子ではなく武王の子とする根拠にはならないと考えます。また『日本書紀』には百濟王子豊璋、百濟王豊璋と記されており、ここでも豊璋は義慈王の王子です。武王の子供

であるとする根拠はありません。

<近畿天皇家が倭国を名乗った>

川瀬さんは当時の「隋」は「倭国」を北九州にあった国ではなく、近畿の推古朝と認識していたとされています。ところが「隋書倭国伝」は“倭国は委奴国から魏・斉・梁と続いできた国（すなわち「倭国」）である”と記しています。『隋書』は北九州にあった国を「倭国＝倭国」と認識していました。中国の歴代王朝で近畿天皇家を「倭国」と呼んでいたとする史料根拠はまったくないと考えます。

何回も繰り返しますが『日本書紀』は九州王朝史書をあたかも自分たちの歴史書であるかのように盗用している政治的な書物です。このような史料はすべて検証が必要と考えています。

投稿：大下隆司 | 2017年10月3日(火)16時29分

大下さんへ

<12年ズレ問題の出発点>

もちろん古田さんが書紀記事の「大唐」に注目して記事が10年以上ずれたと考えたことは承知しています。でもここだけです根拠は。あとは10年以上ずれたと古田さんが判断した根拠こそが検証されなければいけません。

<宝命について>

宝命を一般的に誰でも使えるものとは私は言っていません。人の意見を正しくとらえましょう。王朝が崩れかかっているという特殊な状況の中で普通は初代が使う「宝命を得て」という特殊な用語を煬帝が使ったと考えられないのかと聞いているのです。

辞書の説明をうのみにしてはいけません。辞書の背景には、著者が古典籍をたくさん読んで考えた仮説も含まれます。

<年代移動の根拠>

隋朝において江南に呉国がなかったとする古田さんの立論も、根拠なき推論です。史料がすべてではないですから。悪しき史料第一主義とでもいうべきでしょう。史料の限界を知るべき。

三国史記は12世紀の史書。隋書など先行した中国の史書を写しているのは確実。隋書には斐世清を文林郎と書いているから三国史記がそう書くのはあたりまえ。鴻臚寺の掌客としたのは書紀だけ。

<隋煬帝初期の頃の情勢>

別に周辺諸国の動きだけから隋朝は成立後からすぐ不安定と判断してはいません。それこそ大下さんは私の提言を見ていない。ご自身で隋書帝紀を精査していないのではないのでしょうか。

<舒明紀の王子豊について>

三国史記原文にあたってください。

ネット上にちゃんと載っています。現代語訳を元にしては歴史研究ではありません。現代語訳は訳者の主観が入ります。

ここもご自身で元の史料を精査する必要があります。この手続きなしで私を批判できません。

<近畿天皇家が倭国を名乗った>

隋が近畿天皇家をどう認識したか。それはわかりません。

でも書紀の「大唐」の国書に「倭皇」と書いてることを大下さんは無視するのですか。

すくなくともこれは、古田説に依拠しても、「大唐」は近畿天皇家を「倭国」と認識した証拠です。

以上。

大下さんがご自身で史料を精査しているのではなく、古田説と他の歴史家の現代語訳や辞書にしか依拠していないことがよくわかりました。

これは歴史研究者の態度ではないです。

投稿：川瀬健一 | 2017年10月4日(水)12時57分

川瀬さんへ

RE: 大下は歴史研究者ではないというご指摘

川瀬さんが「歴史研究者」というものをどのように定義しているかわかりませんが、小生は自分を特別な「歴史研究者」だと思っていません。一市民の立場から、古田先生が「従来の日本の古代史解釈がおかしい」と疑問を持たれたことに興味を持ち、自分たちの本当の歴史が知りたいと、日本古代史の勉強を始めたものです。

基本的に市民としての常識をベースとして、すべてのもの事を考えるようにしています。

古田史学による歴史の勉強とは、分かり易くいえば中小路駿逸氏が古田先生の学問の方法について「誰でもが手に触れることが出来るごく一般の史料を、当たり前の方法で当たり前前に解釈された。その結果として、今までとは全く違った古代史像が現れてきた」、と述べられたように、当たり前の方法で、また常識の範囲内でもの事を考えていく勉強方法と思っています。

小生にいう常識とは「誰でもが納得できる当たり前のこと」です。中国、朝鮮の歴史については基本的には一般の解釈がそれほど大きく間違っていないと考えています。またその一般的な認識がおかしいとするだけの知識も能力も判断力も小生にはありません。

川瀬さんの場合は、まず古田批判ありきで、そのために古代の文献の個々の文言を自分なりに解釈し、さらには中国・朝鮮史の解釈変更までいくという手法を取っておられます。結果として普通に考えて誰もが信じられないストーリーになっていると思います。これが歴史研究というなら小生はその立場はとりません。

古田先生の場合は誰もが納得できるストーリーが示されたので多くの賛同者がいたのです。川瀬さんの主張はこのブログの主旨である「古田史学の継承」という目的とは全くかけ離れたものになってきたと思います。

投稿： 大下隆司 | 2017年10月5日(木) 17時52分

大下さんと川瀬さんの応答を読ませて頂いていて思うことは、共通の土俵で戦っていない感じがします。「三国史記」の「故王子」あるいは「古王子」を取り上げる場合、ある程度の文章量が必要だと思われます。そうでないと、判断がしにくいものとなります。

投稿： 川瀬さん。上城です。 | 2017年10月5日(木) 19時56分

大下さん・上城さんへ

忙しいのでしばらく論争をお休みします。

8日から17日までは自宅で写真展開催。22日には日本英学史学会東京大会にて、「越

前府中とアーネスト・サトウ—齋藤修一郎英文自伝補遺②」を発表するので、このための論文を執筆中。あとできたら12月から来年1月の学会例会に、齋藤修一郎評伝のための④「齋藤修一郎と英学②—東京時代の修学内容」を報告したいので、このための論文執筆があります。これら私の本業に専念したいのでしばらく論争から抜けます。

言いたいことは山ほどあります。

大下さんは古田さんの言を誤解していると思います。学問は常識を疑うことにこそその精髓があります。常識とは世間一般の智識であったり自分の先学や師匠の学説であったりします。古田さんが本居宣長の言を引いて「師の説にこそなじんではいけない」と言っていたことは、常識を疑えということでもあります。

歴史を研究するものは安易に他人の解釈や学説に依拠してはいけない。自分自身で当該の史料に直接あたって自分の目でみて頭で考えなければいけない。その意味で辞書の盲信はやってはいけない。辞書もまたその辞書を編んだ研究者の学説です。そして史料の現代語訳もまた訳した学者の学説・解釈です。

本当にそうなのか、自分で検証して初めて学問と言います。

これはプロの学者であっても在野の学者であっても同じことです。これをしない人は学問をしているとは言えない。ただの好事家の物まね。

私が今やってみようとしていること。

「宝命」問題。中国の史書を全部、すくなくとも「隋書」以前の史書を全部あたって、「宝命」と「天命」の使用例を精査すること。これで辞書の解釈が正しいかどうかわかります。

「古王子」「故王子」問題。

当該の史料は短い。三国史記の記事は確実に旧唐書の記事のコピー。三国史記編者は「故王子」を「古王子」と読んだことは確実。では旧唐書で「故」という文字はどのように使われているのか。

ここを全部調べないことにはわかりませんね。

じっくり時間をかけてやるつもりです。

あと、日本書紀の朝鮮関係記事を、中国史書と照らし合わせる作業。これが必要だと思っています。三国史記とも。

この作業をしないと、朝鮮半島をめぐる日本と中国との関係や半島諸国の相互関係はわかりません。ここも「常識」で判断してはいけない。

以上。しばらく休みます。

投稿：川瀬健一 | 2017年10月11日(水) 15時17分

川瀬さんへ

ご指摘有難うございます。

「自分で検証して初めて学問と言います」。 たしかにおっしゃる通りと思います。小生も
どれだけ出来るかわかりませんが、トライして見ます。

投稿： 大下隆司 | 2017年10月12日(木) 18時41分